

公 民 文 庫

校訂徒然草

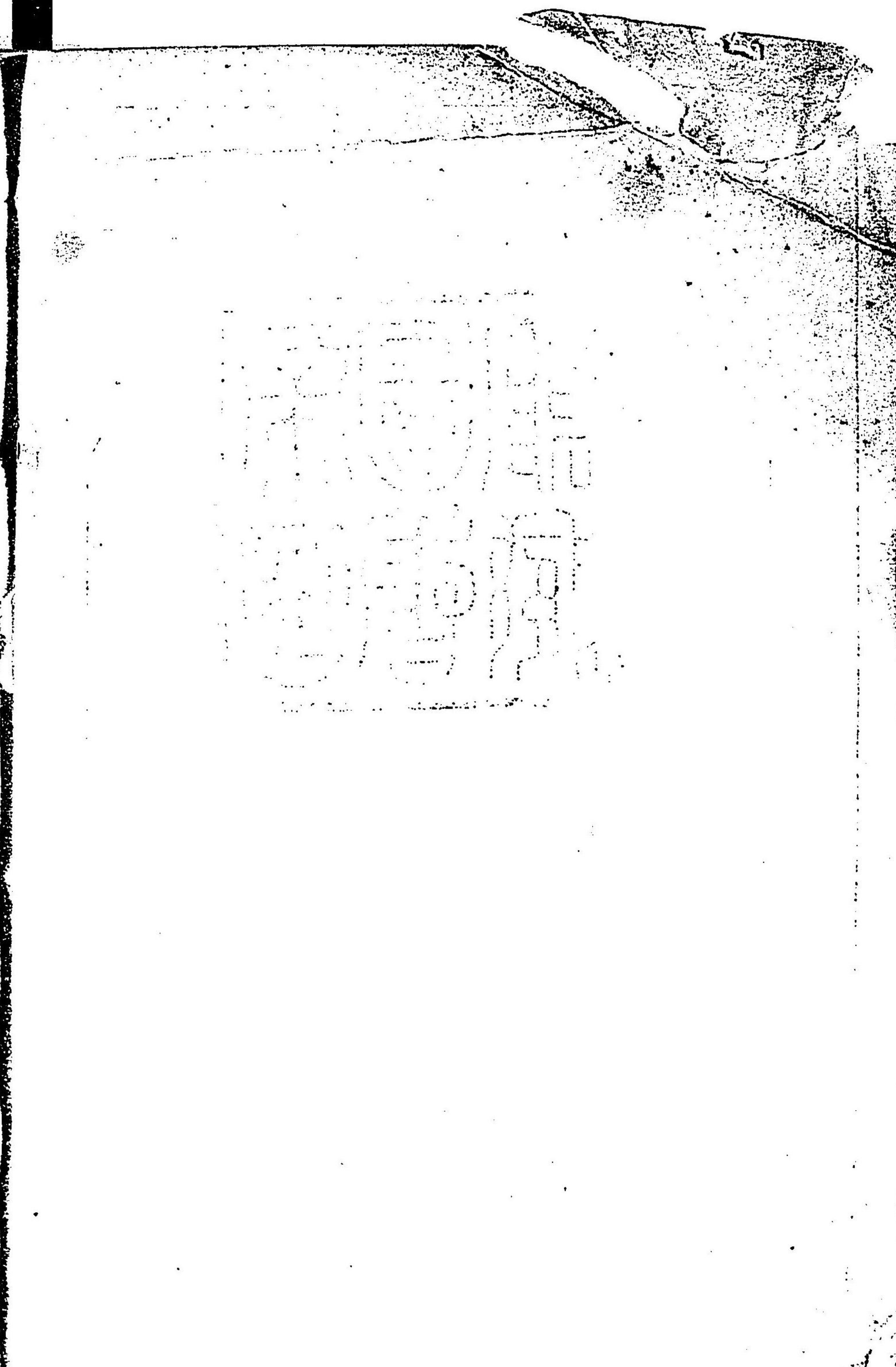
吉田兼好著

261

62

共 同 出 版 株 式 會 社

特 65  
286



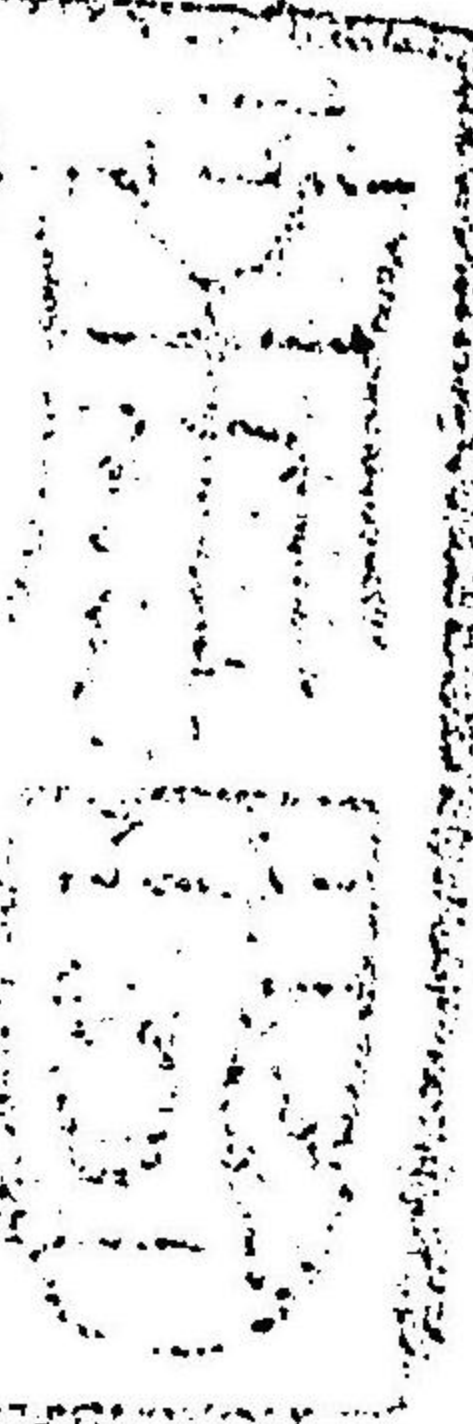
校訂徒然草

吉田兼好

「そこはか」  
常處もなき  
意

「竹の園生」  
皇族親王方  
を云ふ

「この人」  
藤原白をい  
ふ



つれづれなるまゝに日ぐらし硯に向ひて。心に移りゆく  
まじなしごとをそこはかとなくかきつくれば怪しうこ  
そものぐるおしけれ。いでや此世にひまれては願はしか  
るべき事こそおほかめれ帝の御位は、いともかしこし竹  
の園生のする葉まで、人間のたねならぬぞやんごとなき。  
一の人の御有様はさらなり直人もとねりなご給はる際  
は、ゆゝしと見ゆ其子むまごまでははふれにたれぞ猶な  
まめかし。それより下つかたは、ほどにつけつゝ時にあひ  
つれづれ草

いふ意なり  
に立派な俗

つれづれ草

したりかほなるも、自らはいみじと思ふらめど、いと口お  
し。法師ばかり羨ましからぬものはあらじ、人には木のほ  
しのやうに、思はるゝよと、清少納言がかけるも、げにさる  
ことぞかし、勢ひ猛に罵しりたるにつけて、いみじとは見  
えず、増賀ひじりのいひけんやうに、名聞ぐるしく、佛の御  
をしへに、違ふらんとぞおぼゆる、ひたふるの、世すて人は、  
中く、あらまほしきかたもありなん。人はかたち有様の  
すぐれたらんこそ、あらまほしかるべけれ、物うち言ひた  
る聞きにくからず、愛敬ありて、詞おほからぬこそ、あかず  
むかほまほしけれ。めでたしと見る人の、心おとりせらる  
る、本性みえんこそ、口惜しかるべけれ、品かたちこそ、ひま  
れつきたらめ、心はなごか、賢より賢にも、移さば移らざら

「をかしく  
て、かしく  
此詞後世に  
ては冷笑す  
る方に賞み  
すひて賞観  
いする方に  
はす此書中  
處々に賞詞  
あり、皆賞美  
する詞なり

ん、形心さまよき人も、ざへなく成りぬれば、しなくたり、顔  
にくさげなる人にも、立ちまじりて、かけすけをさるゝこ  
そ、ほいなきわざなれ、ありたき事は、誠しき文の、道作文和  
歌管絃の道、又有職に、公事のかた、人の鏡ならんこそ、いみ  
じかるべけれ、手などつたなからず、はしりがき、聲おかし  
くて、拍子とり、痛ましうする物から、げこならぬこそ、男子  
はよけれ。  
いにしへの、聖の御代の政をも忘れ、民の愁國の損はるゝ  
をもしらず、萬にきよらをつくして、いみじと思ひ、所せき  
さましたる人こそ、うたて思ふ所なく見ゆれ、衣冠より馬  
車にいたるまで、有るに従ひて、用ゐよ、美麗を求むる事な  
かれとぞ、九條殿の遺誠にも侍る、順徳院の禁中の事ども

つれづれ草

「さうく物淋しく物足らぬ意也」  
「あふさきるさき住くさ来るさにて心の一方に定まらぬないふ

三 四 五

つれづれ草 四  
かゝせ給へるにも、おほやけの奉り物は疎かなるをもて、よしとすところ侍れ。萬にいみじくとも、色このまざらん男は、いとさうくしく、玉のさかづきのそなき心ちぞすべき、露霜にしほたれて、所さだめすまごひありき、親のいさめ、世のそしりをつゝむに、心のいとまなく、あふさきるさに思ひみだれ、さるはひとり寝がちに、まごるむ夜なきこそおかしけれ、さりとてひたすらたはれたるかたにはあらで、女にたやすからず思はれんこそ、あらまほしかるべきわざなれ。後の世の事心にわすれず、佛の道うとからぬこゝろにくし。不幸に愁へにしづめる人の頭おろしなど、ふつゝかに思

「配所の月」  
「さば誠に静なる事配所同然に記したる月を詠めたきと也」

六

ひとりたるにはあらで、有るかなきかに、門さしこめて、待つ事もなく、明しくらしたる、さるかたにあらまほし、顯基中納言のいひけん、配所の月、罪なくて見んこと、さもおほえぬべし。

我身のやんごとなからむにも、まして數ならざらんにも、子といふ物なくて有りなん、前中書王、九條太政大臣、花園左大臣、みなぞう絶えん事を願ひ給へり、染殿のおととも、子孫おはせぬぞよく侍る、末のおくれ給へるはわろきことなりとぞ、世繼の翁の物語にはいへり、聖徳太子の御墓をかねてつかせ給ひける時も、こゝをきれ、かしこをたて、子孫あらせじと思ふなりと、侍りけるとかや。

仇し野の露、きゆる時なく、鳥部山の煙立ちさらでのみ、住

つれづれ草

五

あだし野鳥  
部山共に葬  
地也

「かげろふ」  
蜻蛉の一種  
極めて細小  
なるもの也

つれづれ草

はつるならひならば、いかに物の憐れもなからん。世は定  
めなきこそいみじけれ。命ある物を見るに、人ばかり久し  
きはなし。かげろふの夕をまち、夏の蟬の春秋をしらぬも  
有るぞかし。つくんと、一年をくらす程だにも、こよなう  
のどけしや、あかずおしと思は、千歳を過すとも、一夜の  
夢の心ちこそせめ。住みはてぬ世に、見にくき姿をまちえ  
て、何かはせん。命ながければ辱おほし、ながくとも、四十に  
たらぬ程にて、死なんこそ、めやすかるべけれ。其ほど過ぎ  
ぬれば、形をはづる心もなく、人に出で交らはんことを思  
ひ、夕の日に子孫を愛して、さかゆく末を見んまでの命を  
あらまし、ひたすら世を貪る心のみふかく、物の哀もしら  
すなり。行きなんあさましき。

「心さきめ  
き」心動き  
せらるゝ意  
なり

八

九

「いもれす」  
安眠せぬを  
いふ

世の人の心惑はす事、色欲にはしかず、人の心はおろかな  
る物かな。匂ひなどは、假の物なるに、しばらく衣裳にたき  
ものすと知りながら、えならぬ匂ひには、必ず心ときめき  
する物なり。久米の仙人の物あらふ女のはぎの白きを見  
て、通をうしなひけんは、誠に手足膚などのきよらに、肥あ  
ぶらつきたらんは、外の色ならねばさもあらんかし。  
女は髪をめたからんこそ、人のめだつべかめれ。人のほ  
ご心ばへなどは、物いひたるけはひにこそ、物ごしにもし  
らるれ事、にふれてうちあるさまにも、人の心をまごはし  
すべて女のうちとけたるいもねず、身をおしとも思ひた  
らず、たゆべくもあらぬわざにも、よくたへしのおは、た  
色をおもふが故なり。誠に愛着の道、其根ふかく源とほし、  
つれづれ草

「六塵」色、  
聲、香、味、  
觸、法の六  
なり。

つれづれ草

八

六塵の樂欲おほしといへども、みな厭離しつべし、其中に  
たゞ、かのまごひのひとつやめがたきのみぞ、老たるもわ  
かきも、智あるもおろかなるも、かはる所なしと見ゆる、さ  
れば女の髪すぢをよれる綱には、大象もよくつながら、女  
のはけるあしだにて作れる笛には、秋の鹿必よるとぞ言  
ひつたへ侍る、みづからいましめて、おそるべく謹しむべ  
きは、このまごひなり。

「つぎ」  
似合しくの  
意  
「きら、か」  
美麗の意  
「實子」様な  
り

家居の、つぎくしく、あらまほしきこそ、假りのやざりと  
は思へど、興ある物なれ、よき人の、のごやかに住なしたる  
所は、さし入りたる月の色も、一きはしみくく見ゆるぞ  
かし、いまめかしく、きらかならぬぞ、木だちものふりて、  
わざとならぬ庭の草も、心有るさまに、すのこすいがいの

「調度」道具  
なり

「心にくし」  
奥深き様也

二

「後徳大寺」  
藤原實定が  
事也

「綾小路宮」  
龜山天皇の  
王子なり

つれづれ草

九

たよりおかしく、うちある調度も、昔おぼえて、やすらかな  
るこそ、心にくしと見ゆれ、おほくのたくみの心を盡して  
磨きたて、唐の大和のめづらしく、えならぬ調度ども、なら  
べをき、前裁の草木まで、心のまゝならず、作りなせるは、見  
るめもくるしく、いとわびし、さてもやは存らへ住むべき  
又時のまの、けふりともなりなんぞ、打みるより思はる  
、大かたは、家居にこそ、ごさまは、おしはからるれ、  
後徳大寺の大臣の、寢殿に、鴛のさせじとて、繩を張られた  
りけるを、西行が見て、鴛のゐたらんは何かは、苦しがるべ  
き、此殿の御心さばかりにこそとて、其後は、参らざりける  
と、聞き侍るに、綾小路宮のおはします、小坂殿の棟に、いつ  
ぞや、繩をひかれたりしかば、かのためし思ひ出られ侍り

三

しに誠や鳥のむれゐて、池の蛙をとりければ、御覽じ悲し  
 ませ給ひてなんと、人の語りしこそ、さてはいみじくこそ  
 と、覺しが、徳大寺にも、いかなるゆへか侍りけん。  
 神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入  
 る事侍りしに、遙なる苔の細道をふみ分て、心細くすみな  
 したる庵あり、木葉にうづもる、寛の雫ならでは、露おと  
 なふものなし、あか棚に、菊紅葉など折ちらしたる、さすが  
 にすむ人のあればなるべし、かくてもあられけるよと、哀  
 に見る程に、かなたの庭に、おほきなる柑子の木の枝も、撓  
 はになりたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ、少し  
 ことさめて、此木なからましかばと、おぼへしか。  
 同じ心ならん人としめやかに物語して、おかしき事も世

「あか棚」佛  
 に水又は香  
 棚を供へる  
 棚なり

「しめやかに」  
 静なる意な  
 り

「つれづれ」  
 心に隔なき  
 事なり

「さつは思  
 ふ」我は然  
 は思はず斯  
 様にも思  
 へば異見を  
 いふ也

「かこつ」腹  
 立て云ふ事  
 なり

四

のはかなき事も、うらなく、いひ慰さまんこそ、うれしかる  
 べきに、さる人あるまじければ、露たがはざらんと、向ひ  
 たらんは、獨ある心ちやせん、互にいはん程のことをば、實  
 にと、きゝがひある物から、聊達ふ所もあらん、人こそ、我は  
 さやは思ふなど、あらそひにくみ、さるからさぞとも、うち  
 語らはい、つれづれ、慰まめと思へど、げにはすこし、かこつ  
 かたも、我とひとしからざらん、人は、大かたのよしなしと  
 といはん程こそ、あらめ、まめやかなの心の友には、はるかに  
 へだゝる所のありぬべきぞ、わびしきや。

ひどり燈火のもとに、文をひろげて、見ぬ世の人を、友とす  
 るこそ、こよなう、慰むわざなれ、文は、文選のあはれなる卷  
 や、白氏文集、老子のことは、南花の篇、この國の博士ごもの



かける物も古しへのは哀なることおほかり。  
 和歌こそ猶おかしき物なれあやしの賤山がつわじわざ  
 もいひ出ればおもしろくおそろしきものしゝも伏猪の  
 床といへばやさしくなりぬ此頃の歌は一ふしおかしく  
 言ひかなへたりと見ゆるはあれど古き歌どものやうに  
 いかになぞや言葉の外にあはれにけしきおほゆるはなし  
 貫之が糸による物ならなくにといへるは古今集の中の  
 歌くづとかや言ひつたへたれど今の世の人のよみぬべ  
 きことがらと見えす其世の歌には姿詞此たぐひのみ  
 おほし此歌に限りてかく言ひたてられたるもしりがた  
 し源氏物語には物とはなしにとぞかける新古今には残  
 る松さへ嶺にさびしきといへる歌をぞいふなるは誠に

「糸による歌  
 云々の糸に  
 は糸の糸に  
 なるもの別  
 なく細くも  
 の心細くも  
 截もほゆる

「瘦る松さ

へんの歌は  
 冬あきて山  
 もの葉はに  
 木の葉ふり  
 残る松へ峯  
 にさびしき  
 作者祝部  
 成仲  
 感じ仰下さ  
 れけるは後  
 鳥羽院也  
 「野曲」節を  
 付けて謳ふ  
 物なり

すこし碎けたるすがたにもや見ゆらんされど此歌も衆  
 議判の時よろしきよし沙汰有りて後にもことさらに感  
 じ仰下されけるよし家長が日記にはかけり歌の道のみ  
 いにしへにかはらぬなど言ふ事もあれどいざや今もよ  
 みあへるおなじ詞歌枕も昔しの人のよめるはさらに同  
 じ物にあらずやすくすなほにして姿もきよげにあはれ  
 もふかく見ゆ梁塵秘抄の野曲の言葉こそ又あはれなる  
 事はおほかめれ昔の人はいかにいひすてたる言種も皆  
 いみじく聞こゆるにや。

いづくにもあれしばし旅だちたるこそめさむる心ちす  
 れ其わたりこゝかしこ見ありき田舎風なかびたる所山里な  
 どはいとめなれぬ事のみぞおほかる都へ便りもとめて

文やるその事かの事便宜べんぎに忘るなど言ひやるこそおか  
しけれ。さやうの所にてこそ萬よろづに心遣ひせらるれ、持てる  
調度てうどまでよきはよく能のりある人、貌かたちよき人も常つねよりは、おかし  
ところ見ゆれ。寺社ていしゃなどに、忍しのびて籠りたるもおかし。  
神樂かみらこそなまめかしく、おもしろけれ、大方物おほかたもののねには、笛  
筆ひつ、常つねに聞きたきは、琵琶びわ和琴わこん。

六

山寺さんじに、かき籠りて、佛ぶつに仕つかふ奉まつるこそ、つれづれもなく、心  
のにごりも、きよまる心ちすれ。

元

人は己おのれをつまやかにし、奢せりを退しりぞけて財たからを持もたず。世よを貪むさ  
らざらんぞ、いみじかるべき。昔むかしより賢かしこき人の、富とみるは稀まれな  
り。唐士たうしに許由きよゆといひつる人は、更さらに身みにしたがへる。貯たくは  
もなく、水みづをも手てしてさゝげて飲のみけるを見て、なりひ

「かしがまし  
くやかまし  
き也」

三

さごといふ物を、人のえさせたりければ、ある時木の枝えだに  
かけたりけるが、風かぜにふかれてなりけるを、かしがましと  
て捨すてつ、又手に、むすびてぞ、水みづものみける。いかばかり、心  
のうちすやしかりけん。孫まご晨あしたは冬月ふゆのつきにふすまなくて、葉は一  
束つかねありけるを、夕ゆふにはこれにふし朝あしたには收あきめけり。唐士たうしの  
人は、是これを、いみじと思へばこそ、記しるしとやめて世よにも傳つたへ  
けめ、これらの人は、語かたりも傳つたふべからず。

「あめれし有  
るに思は  
るに云は  
んが如く少  
し疑を含め  
り」

折節せつせうのうつりかはるこそ、物ごとに哀あはれなれ。物の哀あはれは秋こ  
そまされと、人毎ひとごとにいふめれど、それもさる物にて、今一いまき  
は、心も浮立うきたつ物は、春の景色けしきにこそあめれ、鳥との聲こゑなども、  
ことの外ほかに春はるめきて、のどやかなる日影ひかげに、かきねの草くさも  
え出る比ひより、やゝ春はるふかく霞かすみわたりて、花はなもやうく景けい  
つれづれ草

「花橋歌な  
ぶに昔を忍  
なり例にいふ

水鶏の鳴く  
如くは戸を  
くさ故にた

「腹ふくる  
るに鬱滞し  
る腹の鬱滞  
も如きいひ

「御佛名は  
十二月十九  
日より三日  
間行はる佛  
禁中の佛寺

つれづれ草

色だつ程こそあれ折りしも雨風打ついで来て心あはた  
しくちり過ぎぬ青葉になりゆくまで萬に唯心をのみぞ  
なやます花橋は名にこそおへれ猶梅のにはひにぞ古へ  
の事も立かへりこひしう思ひ出らるゝ山吹のきよげに  
藤のおぼつかなきさましたるすべて思ひすてがたき事  
おほし灌佛の比祭の比若葉の梢すゞしげに茂りゆく程  
こそ世の哀も人の戀しさもまされと人の仰られしこそ  
實にさる物なれ五月菖蒲ふく比早苗とる比水鶏のた  
くなご心ぼそからぬかは六月の比あやしき家に夕顔の  
しろくみえて蚊遣火ふすぶるもあはれなり六月秋又お  
かし七夕まつるこそなまめかしけれやうく夜寒にな  
るほど雁なきてくる比萩の下葉色づくほどわさ田かり

ほすなご取集めたることは秋のみぞおはかる又野分の  
朝こそおかしけれ言ひ續くればみな源氏物語枕草子な  
ごに事ふりにたれごおなじこと又今更にいはじごにも  
あらずおぼしき事いはぬは腹ふくるゝわざなれば筆に  
まかせつゝあぢきなきさびにてかいやりすつべき物  
なれば人の見るべきにもあらずさて冬がれの景色こそ  
秋にはおさくおとるまじけれ汀の草に紅葉のちりと  
ごまりて霜いとしろふをける朝遣水より煙のたつこそ  
おかしけれ年のくれはてゝ人毎に急ぎあへる頃ぞ又な  
く哀なるすさまじき物にして見ゝ人もなき月の寒けく  
すめる廿日あまりの空こそ心ぼそきものなれ御佛名荷  
前の使立つなごぞ哀にやんごとかき公事ごもしげく春

つれづれ草

「荷前の使」  
年の終に代  
々の陵へ勅  
使を立て貢  
物を奉るを  
いふ  
「追儼」は十  
二月晦日に  
行はるゝ例  
の鬼やらひ  
なり

つれづれ草

の急ぎにとりかさねて催ほし行はるゝさまぞいみじき  
や追儼より四方拜につれくこそおもしろけれ晦日の夜  
痛うくらきに松ごもともして夜半すぐるまで人の門た  
たきはしりありきて何事にかあらん事々しく罵りて足  
を空にまごふが曉がたよりさすがに音なくなりぬるこ  
そ年の名残も心ぼそけれなき人のくる夜とて魂まつる  
わざは此頃都にはなきを東の方には猶する事にてあり  
しこそ哀なりしかかくて明け行く空のけしき昨日にか  
はりたりとは見へぬぞ引かへめづらしきこゝちぞする  
大路のさま松たて渡して花やかにうれしげなるこそ又  
あはれなれ。

三

何其とかやいひし世すて人の此世のほだし持たらぬ身

三

に只空の名残のみぞおしきといひしこそ誠にさもおほ  
へぬべけれ。

萬のことは月ふるにこそ慰さむ物なれある人の月ばか  
りおもしろき物はあらじといひしに又一人露こそ哀れ  
なれと争ひしこそおかしけれ折にふれば何かは哀なら  
ざらん。月花はさらなり風のみこそ人に心はつくめれ岩  
に砕てきよく流るゝ水の氣色こそ時をもわかすめでた  
けれ沅湘日夜東流去愁人爲にとまること少時もせず  
といへる詩を見侍しこそ哀なりしか嵇康も山澤にあそ  
びで魚鳥を見れば心樂むといへり人遠く水草きよき所  
にさまよひありきたるばかり心なぐさむ事はあらじ。  
何事も古き世のみぞ慕はしき今様は無下にいやしくこ

三

つれづれ草

「無下」至極  
にてこれよ  
り悪しき事  
はなしきな  
り

「人敷」だて  
燭を取りて  
供奉する也

「朝餉」天子  
の御膳を供  
する間なり  
「陣」節會な  
るの時諸卿  
の列座する  
所なり

つれづれ草

そなりゆくめれかの木の道のたくみのつくれるうつく  
しきうつは物も古代の姿こそおかしと見ゆれ文の詞な  
ぞぞ昔の反古ごもはいみじきたゞいふ言葉も口おしう  
こそなりもてゆくなれ古へは車もたげよ火かゝげよと  
こそいひしを今やうの人はもてあげよかきあげよとい  
ふ主殿寮人数だてといふべきをたちあかししろくせよ  
といひ最勝講の御聴聞所なるをば御講の盧とこそいふ  
をかうろといふ口惜しとぞふるき人の仰せられし。  
衰へたる末の世とはいへど猶九重の神さびたるありさ  
まこそ世づかすめでたき物なれ露臺朝餉何殿何門など  
はいみじとも聞こゆべしあやしの所にもありぬべき小  
蔀小板敷高遣戸などもめでたくこそきこゆれ陣に夜の

「夜」の御殿  
天子の寢所  
なり

三

「齋宮」大神  
宮に仕へ給  
ふ皇女なり  
「中子」染紙  
紙に共に忌  
詞にて中子  
は佛染紙は  
經也

まふけせよといふこそいみじけれ夜のおとりのをばか  
いともしとうよなごいふ又めでたし上卿の陣にて事お  
こなへるさまはさらなり諸司の下人どものしたり顔に  
なれたるもおかしさばかり寒き夜もすがらこゝかしこ  
に眠り居たるこそおかしけれ内侍所の御鈴の音はめで  
たく優なる物なりとぞ徳大寺の太政大臣はおほせられ  
ける。

齋宮の野宮におはします有様こそやさしくおもしろき  
ことこの限りとは覺へしか經佛など忌て中子染紙などい  
ふなるもおかしすべて神の社こそ棄て難くなまめかし  
き物なれや物ふりたる森の景色もたいならぬに玉垣し  
わたして柵にゆふかけたるなどいみじからぬかは殊に

つれづれ草

おかしきは伊勢賀茂春日平野住吉三輪貴布禰吉田大原野松尾梅宮。

云

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば時うつり事さり樂しび悲しびゆきかひて花やかなりしあたりも人すまぬ野らとなり變らぬ住所は人あらたまりね桃李物いはねば誰とともにか昔をかたらんまして見ぬ古へのやんごとなかりけん後のみぞいとはかなき京極殿法成寺など見るこそ志といまり事變じにけるさまはあはれなれ御堂殿の作磨かせ給ひて庄園おほくよせられ我御ぞうのみ御門の御後見世の固めにて行末までと思しをきし時いかならん世にもかばかりあせはてんとはおぼしてんや。大門金堂など近くまでありしかど正和の頃南門はや

「莊園」は寺領に田地を付らるゝ也

三

けぬ金堂は其後倒れふしたるまゝにて取建つるわざもなし無量壽院ばかりぞ其形とてのこりたる丈六の佛九體いとたうとくて並びおはします。行成大納言の額兼行が書ける扉あざやかに見ゆるぞ哀なる。法花堂などもいまだ侍るめり是れも又いつまでかあらんかばかりの名残だになき所々は自から礎ばかり残るもあれどさだかに知れる人もなし。されば萬に見ざらん世までを思ひをきてんこそはかなかるべけれ。

風も吹あへず移ろふ人の心の花になれにし年月を思へば哀と聞し言の葉ごとに忘れぬ物からわが世の外になりゆく習ひこそなき人の別よりもまさりてかなしき物なれ。されば白き糸のそまん事を悲しび道の街のわかれ

「御國讓の節會」天皇御讓位の御式なり  
新院は花園天皇を申す

「諒闇」新帝の喪に籠り給ふ間の事なり  
元

んことをなげく人もありけんかし堀川院の百首の歌の中にむかし見しいもがかけねはあれにけりつばなまじりのすみれのみしてさびしき氣しきさる事侍りけん御國讓りの節會おこなはれて劍璽内侍所わたし奉らるる程こそ限りなう心ぼそけれ新院のおりさせ給ひての春よませ給けるとかやこのもりのさものみやづこよそにしてはらはぬ庭に花ぞちりしく今の世の事しげきにまぎれて院には參る人もなきぞさびしげなるかゝる折に予人の心も顯はれぬべき  
諒闇の年ばかり哀なる事はあらじ倚盧の御所のさまなご板敷をさげあじの御簾をかけて布帳額の東もかうあらしく御調度東もおろそかにみな人のさうぞく太刀平緒

「倚盧の御所の御假殿をいふ」

「具足」品々の道具をいふ  
三

「中陰」佛祖七記に人死後七日之間をいふ  
三

まで、異様なるぞゆゑしき。静かに思へば萬に過にしかたの戀しさのみぞせんかたなき人静りて後永き夜のすさびになにさなき具足とりしたゝめ、残しをかじと思ふ反古破なごやりすつる中に、なき人の手習ひ、書かきすさびたる、見出たるこそ、たゞ其おりのこゝちすれ、此比有る人の文だに、久しくなりて、いかなるおりの年なりけんと思ふは哀なるぞかし、手馴し具足なごも、心もなくて變らず久しきいと悲し。人のなき後ばかり、悲しきはなし、中陰の程、山里なごにうつろひて、便りあしく、狭き所にあまた相居て、後のわざごも、營みあへる、心あはたし、日數の早く過る程ぞ、物にも似ぬ、はての日はいと情けなう、互にいふこともなく、我賢

「跡の爲忌  
む一五墓日  
に葬送すれ  
ば其跡五人  
死するなご  
ないふ様の  
事ご  
也  
「けうさま  
恐ろしき意  
也

つれぐ草

げに物ひきしたゝめ散々にゆきあかれぬもとの住家に  
歸りてぞ更に悲しき事は多かるべきしかくの事はあ  
なかしこ跡のため忘なることぞなごいへるこそかばか  
りのなかに何かはと人の心は猶うたておぼゆれ年月へ  
ても露忘るゝにはあらぬご去る者は日々に疎しと言へ  
る事なればさはいへご其際はかりは覺へぬにやよしな  
しごと言ひて打ちも笑ひぬ骸はけうとき山の中に納め  
てさるべき日ばかり詣でつゝ見れば程なく卒都婆も昔  
むし木葉ふりうづみて夕の嵐夜の月のみぞ言問ふよす  
がなりける思ひ出て忍ぶ人あらん程こそあらめそも又  
程なくうせて聞傳ふるばかりの末々は哀とやは思ふさ  
るは跡とふわざも絶ぬればいづれの人と名をだに知ら

「人のがり  
人の許の意  
なり

三

三

す。年々の春の草のみぞ心あらん人は哀と見るべきをば  
ては嵐にむせびし松も千歳をまたで薪にくたかれ古塚  
はすかれて田となりぬ其かたになくなりぬるぞ悲し  
き。

雪のおもしろう降りたりし朝人のがりいふべき事有り  
て文をやるとて雪のこと何ともいはざりし返事に此雪  
いかい見ると一筆のたまはせぬ程のひがくしからん  
人の仰せらるゝ事聞きいるべきかは返すく口惜しき  
御心なりといひたりしこそおかしかりしか今はなき人  
なればかばかりの事も忘がたし。

九月廿日の頃ある人にさそはれ奉りて明るまで月見あ  
りく事侍しにおぼしいづる所ありて案内せさせて入給

つれぐ草



ひぬ荒たる庭の露しげきに、わざとならぬ匂ひしめやか  
 に打ちかほりて、忍びたるけはひいと物哀れなり。よき程  
 にて出給ひぬれど、猶こごまの優に覺えて、物のかくれ  
 より、しばし見居たるに、妻戸を今すこし押し開て、月みる  
 けしきなりやがてかけこもらましかば、口おしからまし。  
 跡まで見る人ありとは、いかでか知らんかやうの事はた  
 い、朝夕の心遣ひによるべし、其人程なくうせにけりと聞  
 侍し。

「櫛形の穴  
 今いふ火燈  
 口の如きも  
 のか」

今の内裏造り出されて、有職の人々に見せられけるに、い  
 づくも難なしとて、既に遷幸の日近くなりけるに、玄輝門  
 院御覽じて、閑院殿の櫛形の穴は、まろく縁もなくぞあ  
 りしと仰られける、いみじかりけり。是れはえうのいりて、

「甲香螺の  
 類にて香を  
 たくに用ゆ」

木にて縁をしたりければ、誤りにてなをされにけり。  
 甲香は、ほら貝のやうなるが小さくて、口のほどの細長に  
 して、出たる貝のふたなり、武藏國金澤といふ浦にありし  
 を、所の者はへなたりと申侍るとぞいひし。  
 手のわるき人の、憚らず文かき散すはよし、見ぐるしとて、  
 人に書するはうるさし。  
 久しく音づれぬ比、いかばかり恨むらんと、我怠り思ひ知  
 られて、言葉なき心ちするに、女の方より仕丁やある、一人  
 なごいひおこせたるこそ、有がたくうれしけれ、さる心ざ  
 ましたる人ぞよきと、人の申侍し、さも有るべき事なり。  
 朝夕隔てなく馴たる人の、ともある時、我に心を置き引續  
 ろへるさまに、見ゆるこそ、今更かくやはなごいふ人もあ

「二」もある  
時「ふ」とし  
たる時をい

「名利」名の  
爲利の爲に  
動かないふ

「あじき」な  
し「無道」か  
無情「も」か  
きて其味ひ  
なき也

「家」に生れ  
は高位高官  
に昇るべき  
貴族に生れ  
たるなり

つれづれ草

りぬべけれど、猶實々しくよき人かなとぞ覺ゆる。疎き人の打ち解けたる事などいひたる、又よしと思ひつきぬべし。

名利に使はれて、靜なる暇なく、一生を苦しむるこそ愚なれ。財多ければ、身を守るにまごし、害をかひ煩をまねくなかだちなり。身の後には、金をして北斗を柱ふとも、人の爲にぞ煩はるべき。愚なる人の目を悦ばしむる樂み、又あぢきなし、大なる車、肥たる馬、金玉のかざりも、心あらん人は、うたて愚なりとぞ見るべき。金は山にすて、玉は淵になく、べし、利に惑ふはすぐれて愚なる人なり。うづもれぬ名を、永き世に残さんこそあらまほしかるべけれ。位高くやんごとなきをしも、すぐれたる人と、やは言ふべき。愚に拙き

人も、家に生れ時にあへば、高き位にのぼり、奢りを極むるもあり。いみじかりし賢人、聖人、自ら卑しき位にをり、時に遇すしてやみぬる、又多し偏に高き官位をのぞむも、次に愚なり。智慧と心とこそ、世にすぐれたる譽れも、残さまほしきを、つらく思へば、譽れを愛するは、人の聞きを悦ぶなり。ほむる人、誇る人、共に世にと、いならず、傳きかん人、又々速かにさるべし。誰をか、はち誰にか、知られん事を願はん、譽は又、誇りの本なり。身の後の名、残りて更に益なし。是を願ふも、次に愚なり。但し、るて智をもとめ、賢を願ふ人のために、いは、智慧ひいで、は偽りあり。才能は、煩惱の増長せるなり。傳て聞き、學びてしるは、誠の智にあらず。いかなるをか、智といふべき。不可は、一條なり。いかなるをか

「眞人」字は  
莊子に出た  
り此段總し  
て老莊に基  
けり

「斯の如し」  
は迷ひの道  
に迷ひの道  
に入り苦し  
みて名利を  
求むる者は  
かくの如き  
有様なりと  
前の語を結  
べり

つれづれ草

善といふ眞の人は智もなく徳もなく功もなく名もなし。誰か知り誰かつたへん。これ徳をかくし愚を守るにはあらず。本より賢愚得失の堺に居らざればなり。迷ひの心をもちて名利の要を求むるに、かくのごとし。萬事は皆非なり、いふにたらず。願ふにたらず。或人法然上人に、念佛の時睡に侵されて、行を怠り侍る事いかゞして此障りをやめ侍らんと申ければ、目の醒たらんほご、念佛し給へと答られたりける、いと尊とかりけり。又往生は一定と思へば一定、不定と思へば不定なりといはれけり。是も尊とし、又疑ひながらも、念佛すれば、往生すともいはれけり。是も又尊とし。因幡國に、何の入道とかや言ふもの、娘形よしと聞て、人

「あざみ」笑  
ふことなり

「我心には」  
兼好の心に  
あざみなり

あまた言ひわたりけれども、此女たゞ栗をのみ食ひて、更に米の類を食はざりければ、かゝる異様のもの人に見ゆべきにあらずとて、親ゆるさうりけり。五月五日賀茂の競馬を見侍りしに、車の前に雜人たちへだてゝ見へざりしかば、各おりて、埒の際によりたれど、こゝに人多くたちこみて、分け入りぬべきやうもなし。かゝるおりに、むかひなる樗の木に、法師の登りて、木のまたについで物見るあり、とりつきながらいたう眠りて、墮ぬべき時に目を醒す事度々なり。是を見る人、嘲りあざみて、世のしれものかな、かく危うき枝の上にて、やすき心ありて眠るらんよといふに、我心にふとおもひしまゝに、われらが生死の到來、只今にもやあらん、これを忘て物みて日

つれづれ草

「教相」説法  
の作法など  
教ふる人を  
いふ

つれ／＼草  
を暮す愚なる事は猶まさりたる者をといひたれば前なる人ども誠にさにこそ候ひけれ尤愚に候ふといひて皆後を見返りて茲へいらせ給へとて所をさりて呼び入れ侍りにきか程のことわり誰かは思ひよらざらんなれども折からの思ひかけぬ心ちして胸にあたりけるにや人木石にあらねば時にとりて物に感ずる事なきにあらず唐橋中將といふ人の子に行雅僧都とて教相の人の師する僧有けり氣のあがる病ありて年の漸々たくる程に鼻の中塞がりて息もいでがたかりければさま／＼につくるひけれど煩はしくなりて目眉額などもはれまごひて打覆ひければ物も見へず二の舞の面のやうに見えけるが唯恐しく鬼の顔になりて目は頂の方につき額程鼻

「心にくし心の奥深くあなごりにくきないふ

になりなごして後は坊の中の人にも見えす籠り居て年久しくありて猶煩はしくなりて死けりかゝる病も有事にこそありけれ  
春の暮つ方のごやかに艶なる空に賤しからぬ家の奥深く木立物ふりて庭に散萎れたる花見過しがたきをさし入て見れば南面の格子皆下してさびしげなるに東に向きて妻戸のよき程に明きたる御簾の破れより見れば形さよげなる男の年廿ばかりにて打ちとけたれど心にくくのごやかなるさまして机の上に文をくりひろげて見居たりいかなる人なりけん尋ね聞かまほし  
怪の竹のあみ戸の内よりいと若き男の月影に色あひさだかならぬごつやゝかなる狩衣に濃き指貫いとゆるぶ

「えならず」  
えも言がた  
き也

「かごさか  
ましく事か  
こつて事か  
も云ふへく  
蟲の秋の哀  
をかこつて  
泣くを云

きたるさまにて、さゝやかなる童一人を具して、遙なる田  
の中の細道を、稻葉の露にそほちつゝ、分け行くほど、笛を  
えならず吹すさびたる哀とさゝしるべき人もあらずと  
思ふに行かん方しらまほしくて、見送りつゝ、行けば、笛を  
吹き止みて、山のきはに總門の有る内に入りぬ、楊に立て  
たる車の見ゆるも、常よりは目とまる心ちして、下人に問  
へば、しかくくの宮の御座します頃にて、御佛事など候ふ  
にやといふ御堂の方に法師ごも参りたり、夜寒の風にさ  
そはれくる、空焚物の匂ひも身にしむ心ちす、寢殿より御  
堂の廊に通ふ女房の追風用意など、人めなき山里ともい  
はず心遣ひしたり。心のまゝにしげれる秋の野等は、おき  
あまる露に埋もれて、蟲のねかごとがましく、遣水の音つ

哭

哭 哭

ごやかなり。都の空よりは雲の往來もはやき心ちして、月  
のはれくもる事定めがたし。  
公世の二位の兄人に、良覺僧正と聞えしは、極めて腹あし  
き人なりけり。坊の側らに、大きな榎ありければ、人榎の  
僧正とぞいひける。此名然るべからずとて、彼木をきられ  
にけり。其根のありければ、切杭の僧正といひけり。彌々は  
らだちて、きりぐるを掘りすてたりければ、其跡大きな  
堀にてありければ、堀池の僧正とぞいひける。  
柳原の邊に、強盜法印と號する僧ありけり。度々強盜に逢  
ひたる故に、此名をつけにけるとぞ。  
或人清水へ参りけるに、老いたる尼の行連れたりけるが  
道すがらくさめくといひもて行きければ、尼御前何事

つれづれ草

「いらへ」返  
答なり

「はなび」鼻  
の干てクサ  
メする事な  
り

兎

「ついでがさ  
ついでがさ  
も重箱様  
の

舌

つれ／＼草

三八

を斯はの給ふぞと問ひければ、もいらへもせず、猶言ひ止  
まざりけるを、度々問はれて打腹だちて、やゝはなびたる  
時、かくまじなはねば死ぬるなりと申せば、養ひ君の比叡  
の山に兒にて御座ますが、只今もはなび給はんと思へば、  
斯く申しぞかしと言ひけり、有難き志なりけんかし。  
光親卿院の最勝講奉行して候ひけるを、御前へ召されて  
供御を出されて食せられけり、物くひ散したるついがさ  
ねを、御簾のなかへさし入れて罷出にけり、女房あなきた  
な、誰にとれとてかなご申し合れば、有職の振舞ひ止  
事なき事なりと返々感せさせ給ひけるとぞ。  
老來りて、始めて道を行せんと待つ事なかれ。ふるき墳お  
ほくは是少年の人なり、はからざるに病をうけて忽ちに

「つかのま」  
暫の間也

此世をさらんとする時にこそは、はじめ過ぎぬる方のあ  
やまれることは知らるなれ。あやまりといふは他の事に  
あらず、速にすべきことをゆるくし、ゆるくすべき事を急  
ぎて、過にしこと、のくやしきなり。其時悔ゆともかひあら  
んや。人はたゞ無常の身にせまりぬる事を、心にひしとか  
けて、つかのまも忘るまじきなり。さらばなごか此世の濁  
も薄く、佛道を勤むる心もまめやかならざらん昔ありけ  
る聖は、人の來りて自他の要事をいふとき、答へて曰く、今  
火急のことありて、既に朝夕にせまれりとして、耳をふたぎ  
念佛して、終に往生を遂げたりと、禪林の十因に侍り、心戒  
といひける聖は、あまりに此世のかりそめなることを思  
ひて、しづかについゐけること、だになく、常はうづくまり

つれ／＼草

三九

五

「西園寺」當時威勢ある大臣家なり

てのみぞありける。應長の頃伊勢國より女の鬼に成りたるをわて上ぼりたりといふ事ありて其頃廿日斗り日毎に京白川の人鬼見にとて出でまごふ昨日は西園寺に参りたりしけふは院へ参るべし唯今は其處其處になごいひあへり正しく見たりといふ人もなく空言いふ人もなし。上下只鬼の事のみ言ひやまず其頃東山より安居院邊へまかり侍りしに四條よりかみ様の人皆北をさして走る。一條室町に鬼ありと罵りあへり。今出川の邊より見やれば院の御棧敷のあたり更に通り得べうもあらず立ちこみたり早く後なき事にはあらざめりとて人を遣りて見するに大方逢へる者なし暮るゝまでかく立騒ぎてはては鬨諍おこりて

「あらざめり」は非ざるなり

三

錢を足と云ふは錢神論に無足而走と云ふ語より出たり

三

淺ましき事どもありけり其頃押なべて二日三日人の煩ふ事侍りしをぞかの鬼の虚言は此しるじをしめすなりけりといふ人も侍りし。龜山殿の御池に大井川の水をまかせられんとて大井の土民に仰せて水車を作らせられけり多くの足を給ひて數日に營み出して掛けたりけるに大かた巡らざりければとかく直しけれども終にまはらで徒らに立てりけり扱宇治の里人を召してこしらへさせられければ易らかにゆひて参らせたりけるが思ふやうにめぐりて水を汲みいるゝ事めでたかりけり萬に其道を識れるものはやん事なきものなり。仁和寺にある法師年よるまで石清水を拜まざりければ

心うくおぼへて、ある時思ひたちて、たゞ一人歩よりまふ  
 でけり極樂寺高良などを拜みて、かばかりと心得てかへ  
 りにけり。さて片への人に逢ひて、年比思ひつる事果し侍  
 りぬ。さしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも参りた  
 る人毎に山へ登りしは、何事か有りけん、ゆかしかりしか  
 ど、神へ参るこそほいなれと思ひて、山までは見すとぞい  
 ひげる。少しの事にも、先達はあらまほしき事なり。  
 是も仁和寺の法師、童の法師にならんとする名残とて、各  
 遊ぶ事ありけるに、酔ひて興に入るあまり、側なるあしか  
 なへをとりて頭にかつぎたれば、詰るやうにするを、鼻を  
 押しひらめて、顔をさし入れて舞出たるに、満座興に入る  
 事限りなし。しばしかなで、後ぬかんとするに、大方ぬか

る聲に隠れたり  
 聲に隠れたり

れず、酒宴ことさめて、いかがはせんと惑ひけり。とかくす  
 れば、首のまはりかけて血たり、只腫にはれみちて、息もつ  
 まりければ、打割らんとすれど、容易くわれず、響きて堪が  
 たかりければ、協はですべき様なくて、三足なる角の上に  
 帷子を打かけて、手をひき杖をつかせて、京なるくすしの  
 許り率て行きける。道すがら、人の怪しみ見る事かぎりな  
 し。醫師のもとにさし入りて向ひ居たりけん有様、さこそ  
 異様なりけめ、物をいふも、くもり聲にひききて聞えず。  
 かゝる事は文にも見えす、傳へたる教へもなしといへば、  
 又仁和寺へ歸りて、親しき者老たる母など枕上によりゐ  
 て泣きかなしめども、きくらん共おぼへず。かゝるほごに  
 あるもの、いふやうは、假令耳鼻こそきれ失すとも、命は



「欠けうけ」  
欠け穿けの  
意なり

壺

「遊び法師」  
琴笛など奏  
するもの也

かりはなごか生きざらん惟力をたて、引き給へとて、葉のしべをまはりにさし入れて、かねを隔て、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻欠けうけながらぬけにけり。からさ命まふけて、久しく疾むたりけり。御室にいみじき兒のありけるを、争でさそひ出して遊ばんとたくむ法師どもありて、能ある遊び法師どもなご語ひて、風流の破籠様の物、念比にいとなみ出て箱風情の物に認め入れて、雙の岡の便よき所に埋みおきて、紅葉ちらしかけなご思ひよらぬさまにして、御所へ参りて、兒をそそのかし出でにけり。嬉しく思ひて、こゝかしこ遊び巡りて、ありつる苔の庭に並んで、痛こそこうじにたれ、あはれ紅葉を焼かん人もがな、駭あらん僧達祈り試みられよな

「紅葉を焼く」  
酒を焼く  
むる事なり

「つやく」  
一切の意なり

ご言ひしろひて、埋みつる木のもとに向きて、数珠おしすり、印事事しく結出なごして、いらなく振舞ひて、木葉をかきのけたれど、つやく物も見えず、所の違ひたるにやとて、堀らぬ所もなく、山をあされどもなかりけり。うづみけるを人の見置きて、御所へ参りたるまに盗めるなりけり。法師ども言の葉なくて、聞き悪くいさかひ腹立ちて歸りにけり。あまりに興あらんとすることは、必ずあひなき物なり。家の造りやうは夏をむねとすべし。冬はいかなる所にもすまる暑さ比わろき住居は耐へがたき事なり。深き水は涼しげなし、浅くて流れたる遙にすいし細かなる物を見るに、遣戸は蒜の間よりもあかし、天井の高きは冬寒く燈

毛

火くらし。造作は用なき所をつくりたる、見るもおもしろく、萬の用にも立ちてよしとぞ、人の定めあひ侍りし。久しく隔りて逢たる人の、我方にありつる事、數々に残りなく語續くるこそあひなけれ。へだてなく馴れぬる人も、程へて見るは恥かしからぬかは、次さまの人は、あからさまに立出ても、興ありつる事とて、息もつぎあへずかたりに興するぞかし。よき人の物語りするは、人あまたあれど、一人にむきていふを、自ら人も聞くにこそあれ。よからぬ人は誰ともなくあまたの中にうち出て、見る事のやうにかたりなせば、皆同じく笑ひ罵しる、いとらうがはし。をかしき事をいひても、痛く興せぬと、興なき事をいひても、よく笑ふにぞ、品の程計られぬべき。人のみさまのよしあし

「次さまの人も下様の人も」

「らうがはし」  
「亂れがはし」  
「はじきなり」

禿

禿

才ある人は、その事など定めあへるに、己が身にひきかけていひ出たる、いとわびし。人の語り出たる歌物語の歌のわろきこそほいなければ、少し其道知らん人は、いみじと思ひては語らじすべといともしらぬ道の物語りしたる、片腹いたく聞きにくし。道心あらば住む所にしもよらじ、家にあり人に交はるとも、後世を願はんには難かるべきかはと言ふは、更に後世知らぬ人なりげには、此世をはかなみ必ず生死を出でんと思はん、何の興ありてか朝夕君につかへ、家を願みるいとなみのいさましからん。心は縁にひかれて移る物なれば、静ならでは道は行じがたし、其うつはものむかしの人に及ばず、山林に入りても、餓をたすけ、嵐を防ぐよすがな

「なにかは  
何しにの意  
なり」

つれ／＼草 四八  
くては、あらぬわさなれば、おのづから世を貪るに似た  
る事も便にふればなごかなからん。さればとて背けるか  
ひなし。さばかりならば、なじかは捨てしなごいはんは無  
下の事なり。さすがに一度道に入りて、世をいとはん人た  
とひ望ありとも、勢ある人の貪慾多きに似るべからず。紙  
の衾あさの衣、一鉢のまふけ藜のあつ物、いくばくか人の  
ついへをなさん。もとむる所はやすく、其心はやく足りぬ  
べし。形にはづる所もあれば、さはいへど悪にはうとく、善  
には近づくことのみぞおほき。人と生れたらんしるしに  
はいかにもして、世を遁れん事こそあらまほしけれ。偏に  
貪ることをつとめて、菩提に趣かざらんは、萬の畜類にか  
はる所あるまじくや。

「さながら  
そのまゝの  
意なり」

大事を思ひたらん人は、さがたく心にかゝらんことの、  
本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。しばし此事は  
て、おなじくは彼事沙汰しおきて、しかくの事、人の嘲  
やあらん。行末難なくした、めまふけて、年ごろもあれば  
こそあれ、其事待たん程あらじ。物さはがしからぬやうに  
なご思はんには、えさらぬ事のみいとゝかさなりて、事の  
盡くるかぎりもなく、思ひたつ日もあるべからず。おほや  
う人を見るに、すこし心あるきは、皆このあらましにて  
ぞ一期は過ぐめる。近き火などに逃ぐる人は、しばしとや  
いふ。身を助けんとすれば、恥をも願ず、財をも捨て、遁れ  
去るぞかし。命は人を待つ物かは、無常のきたる事は、水火  
のせむるよりも速にのがれがたき物を、其時老いたる親

「このあら  
まし、道心  
起さん、の用  
意のみにて  
なり」

三  
「いもがし  
から芋魁  
事なく親芋の

錢を正と云  
ふは昔錢十  
文を一正と  
し駒引錢を  
一ツ宛入を  
たりとぞ

「しろうる  
りなるこは  
何なるこは  
か古より明  
解なし

つれく草

五〇

いとけなき子、君の恩人の情すてがたしとて、捨ざらんや。  
真乘院に盛親僧都とて、やんごとなき智者ありけり。いも  
がしらといふ物を好みて多く食ひけり。談義の座にても、  
太きなる鉢に堆たかくもりて、膝許に置きつゝくひなが  
ら文をも読みけり。煩ふ事あるには、七日二七日など療治  
とて籠り居て思ふ様によき芋がしらを撰びて殊に多く  
食ひて、萬の病をいやしけり。人にくはする事なし、たいひ  
とりのみぞ食ひけり。極めて貧しかりけるに、師匠死にざ  
まに、錢二百貫と坊一ツを譲りたりけるを、坊を百貫にう  
りて、彼れ此れ三萬疋を、いもがしらのあしとさだめて、京  
なる人に預け置きて、十貫づゝ取寄せて、芋がしらを乏し  
からずめしける程に、又異用にもちゆる事なくて、其あし

みなに成りにけり。三百貫の物を、貧しき身にまうけて、か  
く計ひける。誠に有がたき道心者なりとぞ人申しける。此  
僧都ある法師を見て、しろうるりといふ名をつけたりけり  
とほ、何物ぞと人の問ひければ、さる物を我も知らず、若し  
あらましかば、此僧の顔に似てんとぞいひける。此僧都み  
めよく力強く、大食にて、能書、學匠、辯説人にすぐれて、宗の  
法燈なれば、寺中にも重く思はれたりけれども、世を軽く  
思ひたる癖者にて、萬自由にして大方人に隨ふといふ事  
なし。出仕して饗膳などにつく時も、皆人の前すへわたす  
を待たず、我前にすへぬれば、頓て一人打食ひて、歸りたけ  
れば、一人つゝ立ちて行きけり。齋非時も人にひとしく定  
てくはず、我くひたき時、夜なかにも曉にも食ひて、ねふた

つれく草

五一

三

ければ晝もかけこもりて、いかなる大事あれども、人のいふ事さへいれず。目覺めぬれば、いく夜もいねず。心をすまして嘯きありきなど尋常ならぬさまなれども、人に厭はれず、萬ゆるされけり。徳のいたりけるにや。

御産の時、餽おとす事は定れる事にはあらず。御胞衣滞る時のまじなひなり。こほらせ給ねば、此事なし。下さまより事おこりて、させる本説なし。大原の里のこしきをめすなり。ふるき寶藏の繪に、賤しき人の子うみたる所に、こしきおとしたるをかきたり。

「延政門院  
後嵯峨天皇  
の皇女悦子  
なり」

三

延政門院幼なくおはしましける時、院へまいる人に、御言傳てとて申させ給ひける御歌。ふたつ文字牛のつのもじすくなもじゆがみもじとぞ。君はおほゆる。こひしく思ひ

三

「後七日正  
月八日より  
七日間を云  
ふ」

三

三

三

参らせ給ふと也。

後七日の阿闍梨、武者を集むる事、いつとかや盗人に逢ひけるより、宿直人としてかくことしく成りにけり。一年の相は此修中の有様にこそ見ゆなれば、兵を用ゐむ事、穩ならぬ事なり。

車の五緒は、必人によらず程につけて、きはむるつかさ位に至りぬれば、乗る物なりとぞ、ある人仰せられし。

此比の冠は、昔よりは遙に高く成たるなり。古代の冠桶を、持たる人は、はたをつぎて今は用ゐるなり。

岡本關白殿、盛りなる紅梅の枝に鳥一双をそへて、此枝につけて参らすべきよし、御鷹飼、下毛野武勝に仰せられたりけるに、花に鳥つくる術知り候はず、一枝に二つ付くる

事も存知候はずと申しければ、膳部に尋ねられ、人々に問  
 せ給ひて、又武勝に、さらば己が思はんやうにつけて参ら  
 せよと仰せられたりければ、花もなき梅の枝に一つをつ  
 けて参らせけり、武勝が申し侍りしは、柴のえだ、梅の枝、つ  
 ぼみたると散りたるにつく、五葉などにもつく、枝の長  
 さ七尺、或は六尺、返し、刀五分に切る、枝の半に鳥をつく、つ  
 くる枝ふまする枝ありし、藤のわらぬにて二所付く  
 べし、藤のさきは、火打羽のたけにくらべて切りて、牛の角  
 のやうに撓むべし、初雪のあした枝を肩にかけて、中門よ  
 り振舞ひてぞ参る。大砌の石を傳ひて、雪に跡をつけず、  
 雨覆の毛を少しかなぐり散らして、二棟の御所の高欄に  
 よせかく、祿を出さるれば、肩にかけて拜して退く、初雪と

「火打羽」羽  
 先に長さ羽  
 あり形火打  
 に似たり之  
 れなり

「雨覆」繼の  
 尾にある簀  
 の如きもの  
 なり

穴

「業平」は在  
 「原業平」は藤  
 「實方」は藤  
 原實方

吉水は慈鎮  
 和尚の居れ  
 る所故此  
 名あり

いへども、脊の鼻のかくれぬ程の雪にはまいらず、雨覆の  
 毛をちらす事は、鷹は弱腰を取る事なれば、御鷹の取りた  
 る由なるべしと申しき、花に鳥付けずとは、如何なる故に  
 かありけん、長月ばかりに、梅の作り枝に雉をつけて、君が  
 ためにと折る花は、時しも分かぬといへる事、伊勢物語に  
 見えたり、作り花には苦しからぬにや。  
 賀茂の岩本橋本は、業平、實方なり、人の常にいひまがへ侍  
 れば、一年参りたりしに、老たる宮司の過ぎしを呼び止め  
 て尋ね侍りしに、實方は御手洗に影の移りける所と侍れ  
 ば、橋本やなほ水の近ければとおぼえ侍る、吉水の和尚、月  
 をめで花をながめしいにしへのやさしき人はこゝにあ  
 り、原とよみ給ひけるは、岩本の社とこそ承り置き侍れど、

「近衛」女官  
名なり

五

つれく草  
己らよりは中々御存知などもこそさふらはめといと恭しくいひたりしこそいみじくおぼえしか。今出川の院の近衛とて集ごもに數多入りたる人は、若かりける時常に百首の歌をよみて、かの二つの社の御前の水にて書きて手向られけり。誠にやん事なきはまれ有りて、人の口にある歌おほし。作文詩序などいみじくかく人なり。筑紫に何某の押領使などいふやうなる者のありけるが、土大根をよろづにいみしき薬とて朝毎に二つづ、焼きて、食ひける事、年久しくなりぬ。或時館の内にも人なかりけるひまを計りて、敵襲ひ來りて圍み責めけるに、館の内兵二人出來て、命を惜ます戦ひて、皆追ひ返してけり。いと不思議に覺えて、日比こゝに物し給ふ共見ぬ人々のか

「書寫上人」  
性空上人  
寫山に住へ  
るより云ふ

七

「元應」後醍醐天皇の年  
號なり

く戦ひし給ふはいかなる人ぞと問ひければ、年來頼みて、朝なく召しつる土大根にこそ候ふといひて失せにけり。深く信をいたしぬれば、斯る徳も有りけるにこそ。書寫の上人は、法花讀誦の功積りて、六根清淨にかなへる人なりけり。旅の假屋に立ちいられるに、豆のからをたきて、豆をにける音のつぶくとなるをき、給ひければ、疎からぬ己等しも、うらめしく我をば煮て、辛さめを見する物かなといひけり。焚る、豆がらのはらくとなる音は、わが心よりする事かは、焼かる、はいかばかり堪がたけれども、力なき事なり。斯くな怨み給ひそとぞ聞えける。元應の清暑堂の御遊に、立上はうせにし比、菊亭の大臣、牧馬を彈じ給ひけるに、座に著て先柱を探られたりければ、

つれく草

一つ落ちにけり御懐にそくいをもち給ひたるにて付け  
られにければ神供の参るほとによくひて事故なかりけ  
り。いかなる定趣か有りけん物見ける衣被のよりてはな  
ちてもそのやうにをきたりけるとぞ。

名を聞くよりやがて面影は推量らるゝ心ちするを見る  
時は又兼て思ひつるまゝの顔したる人こそなけれ昔物  
語をきくても此此の人の家のそこほどにてぞありけん  
とおぼえて人も今見る人の事に思ひよそへらるゝは誰  
もかくおぼゆるにや又いかなる折ぞ只今人のいふ事も  
目にもみゆる物も我心のうちもかゝる事のいつぞやあり  
しかと覺えていつとは思ひ出ぬとも正しくありし心ち  
のするは我ばかりかくおもふにや。

三

三

「あいなき  
愛想なき意  
なり」

吉

賤げなるものたるあ居たりに調度の多き硯に筆のおほ  
き持佛堂に佛のおほき前裁に石草木の多き家の内に子  
孫のおほき人に逢て詞の多き願文に作善おほく書のせ  
たる多くて見苦しからぬは文車の文、塵塚の塵  
世に語傳ふる事誠はあひなきにや多は皆虚言なりある  
にも過ぎて人は物をいひなすにまして年月すぎ境も隔  
りぬればいひたきまゝに語りなして筆にも書止めぬれ  
ば頓て定めぬ道々の物の上手のいみじき事など頑固な  
る人の其道しらぬは坐に神の如くにいへども道知れる  
人は更に信もおこさず音にきくと見る時とは何事も變  
るものなり且顯るゝをも願す口に任せていひちらすは  
やがて浮きたる事ときこゆ又我も誠しからずは思ひな



「おごめく」  
動を云ふ

つれく草

がら、人のいひしまゝに、眞のほどおごめきていふは、其人の空言にはあらずげに、しく所々うちおぼめき、能く知らぬよしにて、さりながら、つまづ合せて語る虚言は、恐しき事なり、わがため面目ある様にいはれぬる虚言は、人いたくあらがはず、皆人の興ずる虚言は、ひとりさもなかりしものをといはんも、詮なくて聞き居たるほどに、證人にさへなされて、いと定りぬべし。とにもかくにも、虚言多き世なり。たゞ常にある珍しからぬ事のまゝに、心得たらん、萬たがふべからず。下さまの人の物語は、耳驚く事のみあり。よき人は、怪しき事を語らず。斯くはいへど、佛神の寄特権者の傳記、さのみ信せざるべきにもあらず。是は世俗の虚言を、懇に信じたるも、をこがましく、よもあらず。

「権者」高僧  
智識なり

七

六

なごいふもせんなければ、大かたは誠しくあひしらひて、偏に信せず、又疑ひ嘲けるべからず。蟻の如くに集りて、東西に急ぎ、南北に走る、高さあり、賤しきあり、老たる有り、若きあり、行く所あり、歸る家あり、夕にいぬて朝におく、營む所何事ぞや、生を貪り、利をもとめてやむ時なし。身を養ひて何事をかまつ、期する所、惟老と死とにあり。其來る事速にして、念々の間に止らず。是を待間何の樂かあらん。惑へる者は、これを怖れず、名利に溺れて先途の近事を顧みねばなり。愚なる人は、又是を悲ふ。常住ならん事を思ひて、變化の理を知らねばなり。徒然わぶる人は、如何なる心ならん。紛るゝ方なく、惟獨あるのみこそよけれ。世に隨へば、心の外の塵に奪れて惑ひ

「摩訶止觀」天台の經文なり

易く人に交れば詞よそのきゝに隨ひてさながら心にあ  
らず。人に戯れ物に争ひ、一度はうらみ一度は悦ぶ、其事定  
まれることなし。分別猥りにおこりて得失やむ時なし。惑  
ひの上にもゑり、醉の中に夢をなす、走りて鬨はしく、ほれ  
て忌れたる事、人皆かくのごとし。いまだ誠の道知らず  
とも、縁をはなれて身を閑にし、事に預からずして心を安  
くせんこそ、暫く樂しむともいひつべけれ。生活人事、伎能  
學問等の諸縁をやめよとこそ、摩訶止觀にも侍れ。  
世のおぼえ花やかなるあたり、歎も悦もありて、人おほ  
く行訊らふ中に、聖法師のまじりて、いひ入れ、貯みたるこ  
ろ、さらすとも見ゆれ、然有べき故ありとも、法師は人に  
疎くてありなん。

「もて扱ひ」代々其時評流言の類を云ふ

「今更の人」初めて逢ひたる人なり  
「ごち」同志の意なり

る

世中に其比人のもて扱ひぐさに言合る事、いろふべきに  
は有ぬ人の、よく案内知りて、人にも語り聞せ、問聞きたる  
こそ、うけられぬ。殊に片邊なる聖法師など、世の人の上  
は、我ごとく尋ねき、争でかばかりは知りけん、と覺ゆる  
迄ぞ、いひちらすめり。  
今様の事ごもの珍らしきを、いひ廣めもてなすこそ、又う  
けられぬ。世に事舊りたるまで知らぬ人は、心にくし。今更  
の人などのある時、爰もとに言ひつけたる言種物の名な  
ご心得たるごちかたは、しいひかはし、目見あはせ、笑ひな  
ごして、心しらぬ人に心得ず思はする事、世馴すよからぬ  
人の必ずある事なり。  
何事も入り立たぬ様したるぞよき。人はしりたる事とて、

さのみ知り顔にやはいふ片田舎よりさし出てたる人こそ萬の道に心得たるよしの指應答はすれ。されば世に恥かしきかたもあれど自らもいみじと思へる氣色かたくななり。よく辨へたる道には必ず口重く。とはぬ限りはいはぬこそいみじけれ。

人毎に我身にうとさき事を而已ぞ好める。法師は兵の道をたてゑびすは弓ひくすべしらす。佛法しりたるさそくし連歌し管絃を嗜みあへり。されどおろかなる己が道より、猶人に思ひあなづられぬべし。法師のみにあらず上達部殿上人上様まで押並べて、武をこのむ人おほかり。百度戦ひて百たび勝とも。いまだ武勇の名を定がたし。其故は運に乗じて仇を碎く時、勇者にあらずといふ人なし。兵つ

「上達部」公卿の人なり  
位六位にて  
も昇殿を免  
されたる人  
を云ふ

き矢窮りて遂に敵に降らず。死を安くして後始て名を顯すべき道なり。生けらん程は武に誇るべからず。人倫に遠く禽獸に近き振舞。其家に非ずば好みて益なき事なり。屏風障子などの繪も文字も頑なる筆やうしてかきたるが、見悪きよりも、宿の主の拙なくおぼゆるなり。大方もてる調度にて。心劣りせらるゝ事は有りぬべし。さのみ良き物を持つべし。とにもあらず、損せざらん爲とて品なく見にくき様にしなし。珍しからんとて、用なき事ども爲添へ。煩はしく好みなせるをいふなり。古めかしき様に、いたくことくしからず。費へもなくて物柄のよきがよきなり。

「頼阿」足利

羅の表紙は疾く損するが詫しきと、人のいひしに頼阿が、

時代の歌人  
なり

つれく草

六六

うす物は上下はづれ螺鈿の軸は貝おちて後こそいみじ  
けれど申し侍りしこそ心勝りておぼえしが一部とある  
草子などの同じやうにもあらぬを見悪くしといへど弘  
融僧都が物を必ず一具に調へんとするは拙きものゝす  
る事なり不具なるこそよけれといひしもいみじくおほ  
えし也すべて何も皆事の調ほりたるはあしき事なりし  
のこしたるをさて打置きたるはおもしろくいさのぶる  
わざなり内裏造らるゝにも必ず作りはてぬ所を残す事  
なりと或人申し侍りし先賢の作れる内外の文にも章段  
の闕けたる事のみこそ侍れ。  
竹林院入道左大臣殿大政大臣にあがり給はんに何の滞  
りかおはせんなれども珍しげなし一上にて止みなんと

二上左大臣也

「相國」太政大臣の唐名

全

「見え」云ふは人に見させるなり

六

て出家し給ひにけり洞院左大臣殿此事を甘心し給ひて、  
相國の望おはせざりけり亢龍の悔ありとかやいふ事侍  
るなり月満ちてはかけ物盛にしてはおとろふ萬の事先  
のつまりたるは破れに近き道なり。  
法顯三藏の天竺に渡りて故郷の扇を見ては悲しび病に  
ふしては漢の食を願ひ給ひける事を聞きてさばかりの  
人の無下にこそ心弱き氣色を人の國にて見え給ひけれ  
ど人のいひしに弘融僧都優に情ありける三藏かなと言  
ひたりしこそ法師のやうにもあらず心にくゝおぼえしか  
人の心素直ならねば偽りなきにしもあらずされども自  
ら正直の人なごかなからん己すなほならねど人の賢を  
見て羨むは尋常なり至りて愚なる人はたまゝ賢なる

つれく草

六七

人を見てこれを悪む。大きなる利を得んが爲に、小しきの利をうけず、偽飾りて名をたてんとすと誘ふ己が心に違へるによりて、此嘲りをなすにてしりぬ。此人は下愚の性移るべからず。偽りて小利をも辭すべからず。假にも愚を學ぶべからず。狂人のまねとて大路を走らば、則狂人なり。悪人のまねとて人を殺さば、悪人なり。驥をまなぶは驥の類、舜をまなぶは舜の徒なり。いつはりても、賢をまなばんを賢といふべし。

惟繼中納言は、風月の才にとめる人なり。一生精進にて讀經うちして、寺法師の圓伊僧正と同宿して侍りけるに、文保に三井寺焼かれし時、坊主にあひて、御坊をば寺法師とこそ申しつれど、寺はなければ、今よりは法師とこそ申さ

「文保」花園  
天皇の年號  
なり

父

「先一度せ  
させよ」と  
一杯飲ませ  
よとの義な  
り

めといはれけり。いみじき秀句なりけり。

下部に酒飲する事は心すべき事なり。宇治に住み侍りける男、京に具覺坊とてなまめきたる遁世の僧、小舅なりければ、常に申し睦びけり。或とき迎に馬を遣したりければ、遙なる程なり。口つきのおのこに先一度せさせよとて、酒を出したれば、さしうけよと吞みぬ。太刀打佩きてかひくしげなれば、頼もしく覺えて、召具して行く程に、木幡の邊にて、奈良法師の兵士あまた具してあひたるに、此男立ち向ひて、日暮れにたり。此山中怪しきぞ、止まり候へといひて、太刀を引抜きければ、人も皆太刀ぬき、矢はげなどしけるを、具覺坊手をすりて、うつし心なく醉たる者に候ふまげてゆるし給はらんと、いひければ、各々嘲りて

「ひた切り」  
「ナタラ切り」  
と云ふに同

つれく草 七〇  
過ぎぬ此男具覺坊にあひて、御坊は口おしき事し給ひつ  
る物かな、己醉ひたる事侍らす、高名仕らんとするを、抜  
る太刀空しくなし給ひつる事と怒りて、ひた切りにきり  
おとしつ。さて山賊ありと罵しりければ、里人起りて出で  
あへば、われこそ山賊よといひて、走り加はりつゝ、切り廻  
はりけるを、數多して手おふせ打ち伏せて、縛りけり。馬は  
血つきて、宇治大路の家に趨り入りたり。淺ましくて、男子  
ども數多はしらかしたれば、具覺坊は梶子花原に吟ひ伏  
したるを、求め出てかきもて來つ。辛き命いきたれど、腰さ  
り損せられて、かたわに成りにけり。  
ある者小野道風のかける和漢朗詠集とて持ちたりける  
を、或人御相傳浮ける事には侍らじなれども、四條大納言

矣

「れこまた」  
「猫は和名抄」  
「に子コマタ」  
「にあり又孫」  
「狂の字マタ」  
「さもあれは」  
「れこまたは」  
「所謂一種山」  
「か猫の名なる」

也

撰ばれたる物を、道風かゝん事時代や違ひ侍らん、覺束な  
くこそといひければ、さ候へばこそ世に有難き物には侍  
りけれとて、いよく秘藏しけり。  
奥山に猫またといふものありて、人を食ふなる人とい  
ひけるに、山ならぬども、これらにも猫の經揚りて、ねこま  
たになりて、人とする事はあなる物をといふ者有りけるを、  
なに阿彌陀佛とかや連歌しける法師の行願寺の邊に有  
けるが聞へて、獨りありかん身は心すべき事にこそと思  
ひける頃しも、或所にて夜更くるまで連歌して、只一人歸  
りけるに、小川のはたにて音に聞し猫また、あやまたず  
足許へふとよりきて、頓て搔付くまゝに、頸のほごを食は  
んとす。膽心もうせて、防がんとするに力もなく足もたゝ

つれく草

七一

す。小川へころび入りて、助けよやねこまたよや猫またと  
 叫べば家々より松ごもともして走りよりて見れば、此渡  
 りに見しれる僧なり。こは如何とて河の中より抱きおこ  
 したれば、連歌の賭物とりて、扇小箱など懐に持ちたりけ  
 るも水に入りぬ。希有にして助かりたるさまにて、這々家  
 に入り、にけり、飼ける犬の暗けれど、主をしりて、飛つきた  
 りけるぞぞ。

大納言法印のめしつかひし乙鶴丸、やすら殿といふもの  
 を知りて、常にゆき通ひしに、或時出てかへりきたるを、法  
 印いづくへ行きつるぞと問ひしかば、やすら殿のがりま  
 かりて候ふといふ。其のやすら殿は、男の法師かと又とは  
 れて、袖かきあはせて、いかゞ候ふらん、頭をば見候はずと

こたへ申しき、なごか頭ばかりの見えざりけん。  
 赤舌日といふ事、陰陽道には沙汰なき事なり。昔の人は是を  
 忌まず、此頃何者のいひ出て、いみ始めけるにか、此日ある  
 事未透らすといひて、其日言ひたりし事、したりし事協は  
 ず得たりし物は失ひつ、企てたりし事成らずといふ、愚か  
 なり。吉日を撰びてなしたる業の末とをらぬを、數へて見  
 んも又齊しかるべし。其ゆへは無常變易のさかひ、ありと  
 見るものも存せず、始ある事も終なし、志は遂げず、望はた  
 えす、人の心不定なり。物皆幻化なり。何事か暫くも住する。  
 此理を知らざるなり。吉日に悪をなすに必ず凶なり。悪日  
 に善を行ふに必ず吉なりといへり。吉凶は人によりて日  
 によらず。

「幻化」虚偽  
 無體なり

三

つれく草  
 或人弓ゆみいる事を習まなふに、諸矢しよやを手挿たみて的まきにむかふ師しの  
 曰いはく初心しんしんの人二ふたつの矢やをもつ事ことなかれ、後のちの矢やを頼たのみて初はじめ  
 の矢やに等閑たうかんの心こころあり、毎度まいどたゞ得失とくしつなく、この一箭いちやんに定さだむ  
 べしと思へといふ僅わずかに二つの矢や、師しの前まへにて一つをおろ  
 かにせんと思はんや、懈怠けいたいの心こころ自ら知しらすといへども、師  
 是これを知る。此戒このけいめ萬事ばんじに渡わたるべし。道みちを學まなぶ人ひと、夕ゆふには朝あした  
 あらんことを思ひて、重ねて懇ねんそうに修しゆせんことを期たすいは  
 んや、一刹那いちせつなのうちうちに於おいて、懈怠けいたいの心こころ有あるとを知らんや、な  
 んぞ只今ただいまの一念ねんにおひて、直たちにすることことの甚はなはかたき。  
 牛うしを賣うる者ものあり、買かふ人ひと、明日あす其價あたいをややりて牛うしをとらんとい  
 ふ、夜よのまに牛うし死しぬ、買かはんとする人ひとに利あり、賣うらんとい  
 る人ひとに損そんありとかたる人ひとあり、是こゝろを聞ききて片邊かたへなる者ものの

「刹那」時間  
 の極少也佛  
 書より出づ

四

「いたつが  
 はしく煩  
 勞の意也」

云いく牛うしの主ぬし誠まことに損そんありといへども、又大またなる利あり、其その  
 故ゆゑは、生しやうあるもの死しの近ちかき事ことを知らざる事こと、牛うし既すでにしかな  
 り、人ひと亦また同じ、計はからざるに牛うしは死しし、計はからざるに主ぬしは存ぞんせり。  
 一日いちにちの命いのち萬金まんきんよりもおもしろし、牛うしの價あたい鵝毛かひよりも軽かろし、萬金まんきん  
 を得えて一錢せんを失うしなはん人ひと、損そんありといふべからずといふに、  
 皆人みなひと嘲あざわりて、其理そのことは牛うしの主ぬしに限かぎるべからずといふ。又また曰いはく、さ  
 らば人ひと死しを惡にくまば生しやうを愛あいすべし、存命ぞんめいの悦よろこび日ひ々に樂たのま  
 ざらんや、おろかなる人ひと、此樂このたのしみをわすれて、いたづかはしく  
 外ほかの樂たのしみを求もとめ、此財このたからを忘わすれて危あやうく他たの財たからをむさぼるには、  
 志こころざしみつ事ことなし、生いける間ま生なまを樂たのしますして、死しに臨のぞみて  
 死しを恐おそれば、この理ことあるべからず。人ひと皆生みななまを樂たのまざるは、死し  
 をおそれざる故ゆゑなり。死しを怖おそれざるにはあらず、死しの近ちかき



事を忘るゝなり。若し又生死の相に預らずといはゞ眞の理を得たりといふべしといふに、人いよ／＼嘲る。

蓋 「北面」院附の武官なり

常盤井相國出仕し給ひけるに、勅書を持ちたる北面あひ奉りて、馬より下りたりけるを、相國後に北面何某は勅書を持ちながら下馬し侍りし者なり、かほどの者いかでか君に仕ふまつり候ふべきと申されければ、北面を離たれにけり、勅書を馬の上ながら捧げて見せ奉るべし、下るべからずとぞ。

箱のくりかたに緒をつくる事、何方につけ侍るべきぞと、ある有識の人に尋ね申し侍りしかば、軸につけ表紙にくる事、兩説なれば、いづれも難なし。文の箱は多く右にく、手箱には軸につくるも常の事なりと仰せられき。

老

めなもみといふ草あり、蝮にさゝれたる人、かの草をもみ

穴

てつけぬれば、則ち瘡ゆとなん、見知りて置くべし。其物につきて、其物を費しそこなふもの數を知らずあり、身に虱あり、家に鼠あり、國に賊あり、小人に財あり、君子に仁義あり、僧に法あり。

穴

尊き聖のいひをさける事を書き付けて、一言芳談とかや名づけたる草子を見侍りしに、心にあひて覚えし事ども一爲やせまじ、爲すやあらまじと思ふ事は、おほやうせねはよきなり。

「糶」俗に云ふ糖味贈なり

一後世を思はん者は、糶瓶一も持つまじき事なり、持經本尊に至るまで、よき物をもつ、よしなき事なり。一遁世者は、なきに事かけぬやうを計らひて過ぐる、最

「上臈」上位の人なり

つれく草  
上の様にてあるなり。

一。上臈は下臈になり、智者は愚者になり、徳人は貧になり、能有る人は無能になるべきなり。

一。佛道を願ふといふは、別の事なし、暇有る身になりて、世の事を心にかけてぬを、第一の道とす。

此外もありし事共おぼへず。

「過差」奢れる義なり  
「大理」檢非違使の唐名

堀川相國は美男の樂しき人にて、其事となく過差をこのみ給ひけり。御子基俊卿を大理になして、應務行はれけるに、廳屋の唐櫃見ぐるしとて、めでたく作り改めらるべきよし仰せられけるに、此唐櫃は上古より傳りて、其始を知らず、數百年を経たり、累代の公物古幣をもつて規模とす、容易く改められ難きよし、故實の諸官等申しければ、その

事やみにけり。

二三

「まがり」梳なり

二三

久我相國は、殿上にて水を召しけるに、主殿司土器を奉りければ、まがりを參らせよとて、まがりしてぞめしける。

或人任大臣の節會の内辨を勤められけるに、内記のもちたる宣命を取らずして、堂上せられにけり、きはまりなき

失禮なれども、立歸りとるべきにもあらず、思ひ煩はれけるに、六位外記康綱衣被の女房を語らひて、彼の宣命をもたせて、忍びやかに奉らせけり。いみじかりけり。

二三

「次第」を申し請く其作法は、次第なり也

右大臣殿に次第を申し請けられければ、又五郎男を師とするより、外の才覺候は、じとぞ宣ひける。彼又五郎は、老たる衛士の善く公事に馴れたる者にて、ぞありける。近衛殿

つれく草

着陣し給ひける時、ひざつきを忘れて外記をめされければ、火たきて候ひけるが、先膝突をめさるべくや候ふらんと、忍びやかにつぶやきける、いとおしかりけり。  
 大覺寺殿にて近習の人ども、なぞくを作りて解かれける處へ、醫師忠守参りたりけるに、侍従大納言公明卿、我朝のものとも見えぬ忠守哉と、なぞくをにせられけるを、唐瓶子とときて笑ひ合はれければ、腹立ちて退出にけり。  
 荒れたる宿の人めなきに、女の憚る事ある比にて、つれづれと籠り居たるを、或人とぶらひ給はんとて、夕月夜のおぼつかなきほどに、忍びて尋ねおはしたるに、犬のごとくしくとがむれば、下す女の出で、いづくよりぞといふに、やがて案内せさせていり給ひぬ、心ほそげなる有様、いか

で過すらんと、いと心ぐるし。あやしき板敷に、しばし立ち給へるをもてしづめたるけはひの若やかなるして、こなたへといふ人あれば、たてあけ所せげなる遣戸よりぞ入り給ひぬ。内のさまはいたくすさまじからず、心にくく、火はあなたにはのかなれど、物の綺羅など見えて俄にしもあらぬ匂ひ、いとなつかしう住みなしたり、門よくさしてよ、雨もぞふる、御車は門の下に、御供の人はそのく、にといへば、今宵ぞやすきいはぬべかめると、うちさいめくも忍びたれど、ほそなければほのきこゆ。さて此程の事どもこまやかに聞え給ふに、夜ぶかき鳥もなきぬ。こしかた行末かけて、まめやかなる御物語に、この度は鳥も花やかなる聲に打しきれば、明け離るゝにやと聞き給へど、夜深く

急ぐべき所のさまにもあらねば、すこしたゆみ給へるに  
ひましろくなれば、忘れがたき事などいひて、立ち出で給  
ふに、梢も庭もめづらしく青みわたりたる、卯月ばかりの  
曙艶におかしかりしをおぼし出て、桂の木の犬ながるか  
くる、／＼まで、今も見をくり給ふとぞ。

北の家かげに消え残りたる雪の、いたうこほりたるにさ  
し寄せたる車の轆も、霜いたくさらめきて、有明の月さや  
かなれども、隈なくはあらぬに、人ばなれなる御堂の廊に、  
なみ／＼にはあらずと見ゆる男女と長押にしりかけて、  
物がたりするさまこそ何事にかあらんつきすまじけれ。  
頭貌などいとしと見えて、えもいはぬ匂ひのさとかほ  
りたるこそおかしけれ、けはひなどはつれ／＼聞えたる

もゆかし

高野證空上人、京へ登りけるに、細道にて馬に乗りたる女  
の行き逢ひたりけるが、口引きける男、悪く引きて、聖の馬  
を堀へ落してけり、聖いと腹あしく答めて、こは希有の狼  
藉かな、四部の弟子はよな、比丘よりは比丘尼は劣り、比丘  
尼より優婆塞はおどり、うばそくより優婆夷はおとれり。  
かくの如くの優婆夷などの身に、比丘を堀に蹴入れさ  
する、未曾有の悪行なりといはれければ、口引の男、いかに  
仰せらる、／＼やらん、えこそ聞き知らぬといふに、上人猶い  
さまさて、何といふぞ、非修非學の男と、荒らかにいひて、窮  
りなき放言しつと思ひける、氣色にて、馬ひき返して、遁げ  
られにけり、尊とかりけるいさかひなるべし。

「よな」歎息  
調なり

腹立ちて怒  
る激也

女メの物いひかけたる返事かへしとりあへずよきほごにする男  
 は有がたきものぞとて龜山院かめやまのゐんの御時ごときしれたる女房にようぼうども  
 わかき男たちの参らるゝごとに郭公かくこうやきゝ給へると問  
 ひて試みこころられけるに、なにがしの大納言おほののりとかやは數なら  
 ぬ身はえ聞き候はずと答へられけり堀川内大臣殿ほりがわのちだいじんは、岩  
 倉いわたにて聞きていひしやらんと仰せられたりけるを、是は  
 難なんなし、數ならぬ身むづかしなご定めあはれけり。すべて  
 男おとこをば、女メに笑はれぬやうにおふしたつべしとぞ淨土寺じゆつど  
 前關白殿さきのくわんぱくはをさなくて、安喜門院あんきもんゐんのよく教へ参らせさせ  
 給ひける故に、御詞ごことばなどのよきぞと人の仰せられけると  
 かや山階左大臣殿やまかゝりさだいじんは、あやしの下女げにようめの見奉るも、いとほづ  
 かしく心づかひせらるゝところ仰せられけれ、女のなき

世よなりせば衣紋えもんも冠かぶともいかにもあれ、ひきつくるふ人も  
 侍さむらいらじ、かく人に恥はぢらるゝ女メ、いかばかりいみじき物ぞと  
 思おもふに、女の性しやうは皆みなひがめり。人我ひとがの相あひふかく、貪欲どんよく甚はなはしく  
 物の理ことわりをしらず、たゞいまよひの方に心こゝろもはやくうつり詞ことば  
 も巧たくみに苦くるしからぬ事ことをも問とふ時は、いはず用意よういあるかと  
 見れば、又また淺あはましき事ことまでとはすがたりにいひ出す、深く  
 たばかり飾かざれることは男おとこの智惠ちゑにもまさりたるかと思  
 へば、その事跡ことあとより顯あらはるゝを知らず、質朴しやんぱくならずして拙つたき  
 ものは女メなり、其心こゝろに隨したがてよく思はれん事は、心こゝろうかるべ  
 し。されば何かは女メのはづかしからん。もし賢女けんじよあらば、そ  
 れも物ものうとくすさまじかりなん、たゞ迷まよひをあるじとして、  
 かれに隨したがふ時とき、やさしくもおもしろくも覺おぼゆべき事ことなり。

寸陰おしむ人なし此れよく知れるか愚なるか愚にして  
 怠る人のために言はゞ一銭かろしといへども是を重ぬ  
 れば賤しき人を富める人となすされば商人の一銭を惜  
 む心切なり刹那おぼえずといへども是を運びてやまざ  
 れば命を終る期忽ちにいたるされば道人は遠く日月を  
 惜むべからず只今の一念空しく過る事を惜むべしもし  
 人來りて我命あすは必ず失はるべしと告しらせたらん  
 に今日の暮る間何事をか頼み何事をかいとなまん我等  
 がいけるけふの日なんぞ其時節にことならん一日のう  
 ちに飲食便利睡眠言語行歩やむ事をえずして多くの時  
 を失ふ其餘りの暇いくばくならぬうちに無益の事をな  
 しむやくの事をいひ無益の事を思惟して時をうつすの

「便利」大便  
 小便なり

「謝靈運」晋  
 人なり

「風雲の思  
 色を山木の  
 愛せしなりに

みならず、日を消し月を亘りて、一生を送る尤愚なり謝靈  
 運は法花の筆受なりしかども心常に風雲の思ひを觀せ  
 しかば惠遠白蓮の交をゆるさうりき暫くも是なき時は、  
 死人に同じ光陰何の爲にか惜とならば内に思慮なく外  
 に世事なくして止ん人はやめ修せん人は修せよとなり、  
 高名の木登りといひしおのこ人を拵て、高き木にのぼ  
 せて梢を切らせしにいと危うくみえし程はいふ事もな  
 くて下るゝ時に軒だけばかりに成りて過ちすな心して  
 おりよと詞をかけ侍りしをかばかりになりては飛下る  
 る共おりなんいかにかくいふぞと申し侍りしかば其事  
 に候ふめくるめき枝あやうき程は己がおそれ侍れば申  
 さず過ちは安き所になりて必ず仕る事に候ふといふあ

「下臈」下賤の者を云ふ

二三

「四重」殺、五逆、姦淫、阿羅漢、佛、身、血、出、す、なり、一三

つれ／＼草

八八

やしき下臈なれども、聖人の戒めにななへり、鞠もかたき所を蹴出して後安く思へば、必ずおつと侍るやらん。双六の上手といひし人に、其術をとひ侍りしかば、勝たんと折つべからず、負けじどうつべき也、何れの手か疾く負けぬべきと案じて、其手をつかはずして、一目なり共遅くまくべき手につくべしといふ道を知れる教へ、身を治め國を保ん道も又しかなり。圍碁双六好てあかし暮す人は、四重五逆にもまされる悪事とぞ思ふと、ある聖の申し事耳に留まりていみじくおぼえ侍る。明日は遠國へ趣くべしと聞かん人に、心静になすべからん業をば、人いひかけてんや、俄の大事をもいとなみ、切に

二四

つれ／＼草

八九

歎く事もある人は、他の事きゝ入れず、人の愁喜をもとはず、問はずとてなごやと恨むる人もなし。されば年もやう／＼たけ病にもまづはれ、況や世をも遁れたらん人、又是に同じかるべし。人間の儀式いづれの事か去りがたからぬ、世俗の黙止がたきに随ひて、これを必ずとせば願もおほく、身も苦しく、心の暇もなく、一生は雑事の小節にさへられて空しく暮れなん。日暮れ途遠し、吾生既に蹉跎たり、諸縁を放下すべき時なり。信をも守らじ、禮義をも思はじ、此心をえざらん人は、物狂ともいへ、現なし情なしとも思へ、誹るとも苦しまじ、譽むとも聞きいれじ。四十にもあまりぬる人の色めきたるかた、をのづから忍びてあらんはいかたはせん。ことにうち出て、男女の事

人のうへをもいひ戯るゝこそ似げなく見くるしけれ。犬  
かた聞にくゝ見ぐるしき事、老人の若き人にまじはりて、  
興あらんと物いひ居たる。數ならぬ身にて世のおぼえあ  
る人を、へだてなきさまにいひたる。貧しき所に酒宴この  
み、客人饗應せんときらめきたる。

二三

今出川のおほい殿、嗟峨へおはしけるに、有栖川の渡りに  
水の流れたる所にて、齋王丸御牛を追ひたりければ、腕き  
の水前板までざゝと掛りけるを、爲教御車のしりに候ひ  
けるが、希有の童かな、かゝる所にて御牛をは追ふ物かど  
いひたりければ、おほい殿御氣色あしくなりて、己車やら  
ん事、齋王丸に勝りてわしらし、希有の男なりとて、御車に  
頭を打ちあてられにけり。此高名のさい王丸は、太泰殿の

「所きの水」  
牛の足振の  
爲に水のほ  
もばしりし  
也

二六

男料の御牛飼をかし。此太泰殿に侍りける女房の名ごも、  
一人は膝幸、一人は恃槌、一人は胞腹、一人は乙牛とつけら  
れけり。  
宿河原といふ所にて、ぼろくおほく集りて、九品の念佛  
を申しけるに、外より入りくるぼろくのもの、もし此中にい  
ろをし坊と申すば、ろやおはしますと尋ねければ、其中よ  
りいろをしこゝに候ふ、かくの給ふはたぞと答ふれば、し  
ら梵字と申す者なり、をのれが師。なにがしと申す人、東國  
にていろをしと申すば、ろに殺されけりと承りしかば、其  
人に逢ひ奉りて、恨み申さばやと思ひて尋ね申す也とい  
ふ。いろをしゆゝしくも尋ねおはしたり、さる事侍りき、こ  
ゝにて對面し奉らば、道場をけがし侍るべし。前の河原へ



「わきざし  
たらし」朋輩  
達の義なり  
「みつきこ助  
太刀なり

つれく草

まいりあはん、あなかしこ、わきざしたち。いづかたをもみ  
つき給ふな、あまたのわづらいにならば、佛事の妨に侍る  
べしといひ定めて、二人河原に出であひて、心行くばかり  
に、つらぬきあひて、共に死にけり。ぼろくといふもの昔  
はなかりけるにや、近き世に、梵論字、梵字、漢字などいひけ  
るもの、其始なりけるとかや、世を捨てたるに似て、我執ふ  
かく、佛道をねがふに似て、闘諍をこそ、す放逸無慚の有  
様なれども、死を軽くして、少しもなづまざる方のいさぎ  
よく覺えて、人の語りしまゝに書きつけ侍るなり。  
寺院の號、さらぬよるづの物にも名を付くる事、昔の人は  
少しも求めず、たゞありのまゝに安く付けるなり。此比は  
深く案じ、才覺を顯はさんとしたるやうに聞ゆる、いとむ

二七

つかし。人の名も、めなれぬ文字を付かんとする、益なき事  
なり。何事も珍らしきことを求め、異説を好むは、淺才の人  
の必ず、ある事なりとぞ。

二八

友とするに、わるきもの七あり。一には高く止事なき人。二  
には若き人。三には病なく身つよき人。四には酒をこのむ  
人。五には武く勇める人。六には虚言する人。七には欲ふか  
き人。善き友三あり。一には物くるゝ友。二には醫師。三には  
智惠ある友。

二九

鯉の羹くひたる日は、鬢そゝけずとなん。膠にもつくるも  
のなれば、ねばりたるものにこそ。鯉ばかりこそ、御前にて  
も切らるゝものなれば、やんごとなき魚なり。鳥には雉、左  
右なきものなり。雉、松茸などは、御湯殿の上に掛りたるも

「湯殿料理  
の間を云ふ  
湯をわかばし  
なり物を煮ればし

つれく草

苦しからず、其外は心うき事なり。中宮の御方の御湯殿の上の黒み棚に鴈の見えるを、北山入道殿の御覽じて歸らせ給ひて、頓て御文にて、かやうの物さながら其姿にて、御棚にゐて候ひし事、見習はす様あしき事なり、はかしくしき人さふらはぬ故にこそ、なご申されたりけり。

三

鎌倉の海にかつほといふ魚は、彼境には左右なき物にて、此比もてなすものなり。夫も鎌倉の年寄の申し侍りしは、此魚己ら若かりし世までは、はかしく敷人の前へ出づる事侍らざりき。頭は下部もくはず、きりて捨て侍りしものなりと申しき。かやうのものも世の末になれば、上さままでも入りたつわざにこそ侍れ。

三

唐のものは、薬の外はなくとも事かくまじ。書どもは此國

に多くひろまりねれば、書きもうつしてん。唐土船のたやすからぬ道に、無用の物ごものみ取積みて、所せく渡しもてくるいとおろかなり。遠きものを寶とせずとも、又得がたき寶をたうとますとも、文にも侍るとかや。

三

養ひかふものには、馬牛繋ぎ苦しむるこそいたましけれど、なくてはかなはぬものなれば、いかうはせん。犬は守り防ぐつとめ、人にもまさりたれば、必ずあるべし。されど家毎にあるものなれば、殊更に求め飼はず共ありなん。其外の鳥獸すべて用なきものなり。はしる獸は牢にこめ鎖をさへ、飛鳥は翅をきり籠に入れられて、雲を戀ひ野山を思ふ愁やむ時なし。其思ひ我身に當りて、忍びがたくは、心あらん人。是を樂しまんや。生をくるしめて目を悦ばしむる

「王子猷」晋  
人なり  
「珍らしき  
禽云々」向  
者旅契にあ

三

つれ／＼草  
九六  
は桀紂が心なり。王子猷が鳥を愛せしは、林にたのしむを  
見て逍遙の友としき。捕へくるしめたるに、あらず。凡そ珍  
らしき禽、怪しき獸、國に養はずとこそ、文にも侍るなれ。  
人の才能は、文明らかにして、聖の教を知れるを第一とす。  
次には手書く事、旨とする事とはなく、共是を習ふべし。學  
問に便あらんためなり。次に醫術を習ふべし。身を養ひ人  
を助け、忠孝の勤も醫にあらずは、あるべからず。次に弓射  
馬に乗る事、六藝に出せり。必ず是をうかひふべし。文武醫  
の道、誠に缺けては、あるべからず。是を學ばんをば、徒なる  
人といふべからず。次に食は人の天なり、よく味を調へし  
れる人、大なる徳とすべし。次に細工、よろづに要おほし。此  
外の事ども、多能は君子の恥づる處なり。詩歌に巧みに、絲

三

竹に妙なるは、幽玄の道。君臣是を重くすと、いへども、今の  
世には、これをもちて世を治むる事、漸く恐なるに似たり。  
金はすぐれたれども、鐵の益多きにしかざるがごとし。  
無益の事をなして時をうつすを、愚なる人とも、僻事する  
人とも、いふべし。國の爲君のため、にやむことを得ずして  
なすべき事おほし。其餘りの暇、いくばくならず思ふべし。  
人の身に止むことをえずして、營む所、第一に食物、第二に  
きる物、第三に居所なり。人間の大事、此三には過ぎず。飢ゑ  
ず寒からず、風雨におかされずして、閑に過すを樂とす。但  
人皆病あり、病に冒されぬれば、其愁忍びがたし。醫療を忘  
るべからず。薬を加へて、四の事求めざるを、貧しとす。此  
四つかけざるを、富めりとす。此四の外を求め、營むをおこ

つれ／＼草

りどす。四の事儉約ならば、誰の人か足らずとせん。  
是法法師は淨土宗にはちすといへども、學匠をたてず、ただ明暮念佛して、やすらかに世を過す有様いとあらまほし。

三

人に後れて、四十九日の佛事に、或聖を請じ侍りしに、説法いみじくして、皆人涙を流しけり。導師歸りて後、聽聞の人ども、いつよりも殊に今日は尊く覺え侍りつると感じあへりし返事に、或者の曰何とも候へ、あれほど唐の狗に似候ひなん上はと言ひたりしに、哀もさめておかしかり。り。さる導師の譽めやうやはあるべき、又人に酒勸むるとて、己先たべて人に強ひ奉らんとするは、劍にて人を斬らんとするに似たる事なり。二方に及つきたるものなれば、

三

もたぐる時先我頭を斬る故に、人をばえさらぬなり。をのれ先酔ひて臥しなば、人はよもめさじと申しき、劍にてきり試みたりけるにや、いとおかしかりき。  
博奕の負きはまりて、残りなくうち入れんとせんに、あひてはうつべからず立ち歸りついで勝つべき時のいたれると知るべし。其時を知るを、よきばくちといふなりと、ある者申しき。

三

改めて益なき事は、改めぬをよしとするなり。  
雅房大納言は才賢くよき人にて、大將にもなさばやと思しける比院の近習なる人、只今淺ましきとを見侍りつと申されければ、何事ぞと問はせ給ひけるに、雅房卿鷹にか

三

はんとして、生きたる犬の足をきり侍りつるを、中墻の穴

より見侍りつと申されけるに、疎ましく悪く思召して、日  
 來の御氣色もたがひ昇進もし給はざりけり。さばかりの  
 人、鷹を持たれたりけるは思はずなれど、犬の足は跡なき  
 ことなり。虚言は不便なれども、かゝる事を聞せ給ひて、に  
 くませ給ひける君の御心はいとたうとき事なり。大方生  
 けるものを殺し、いため戦はしめて遊び樂まん人は、畜生  
 殘害のたぐひなり。萬の鳥獸ちいさき虫までも、心をこ  
 めて有様を見るに、子を思ひ親をなつかしくし、夫婦をど  
 もなひ、妬み怒り欲おほく、身を愛し、命をおしめること、偏  
 に愚痴なる故に、人よりも勝りて甚し。彼に苦しみをあた  
 へ、命を奪はんこと、いかでか痛ましからざらん。すべて一  
 切の有情を見て、慈悲の心なからんは、人倫にあらず。

三

顔回は志人に勞を施さじとなり。すべて人をくるしめ物  
 をしへたぐるること、賤しき民の志をも奪ふべからず。又幼  
 なき子をすかしおごし、言ひ辱しめて興ずる事あり。おご  
 なしき人は、誠ならねば事にもあらず。思へど、幼き心には、  
 身に染みて怖しく、恥しく、淺ましき思ひ、誠に切なるべし。  
 是を惱まして興ずること、慈悲の心にあらず。おとなしき  
 人の喜び、怒り、悲し、ひ樂ふも、皆虚妄なれども、誰か實有の  
 相に着せざる。身を破るよりも心をいたましむるは、人を  
 害ふこと猶甚し。病をうくる事も、多くは心よりうく。外よ  
 り來る病は、少なし。藥をのみて汗を求むるには、驗しなき  
 ことあれども、一旦恥ぢおそるゝとあれば、必ず汗を流す  
 は心のしわざなりと言ふことを知るべし。凌雲の額を書

後書臺の額  
白雲の心  
人愛する  
痛ましき  
心む

つれく草

て、白頭の人となりしたためしなきにあらず。  
物に争はず己を曲げて人にしたかひ我身を後にして人  
を先にするにははしかず萬の遊びにも勝負を好む人は勝  
ちて興あらんためなり。おのれが藝の勝りたる事をよろ  
こぶ。さればまけて興なく覺ゆべきこと。又知られたり。我  
負けて人を悦ばしめんと思はれ、更にあそびの興なかる  
べし。人に本意なく思はせて、我心を慰めんこと徳に背け  
り。むつまじき中に戯るゝも、人を謀り欺きて、おのれが智  
の勝りたることを興とす。是又禮にあらず。されば始め興  
宴より起りて、長き恨をむすぶ類。おほし。是皆争ひを好む  
失なり。人に勝たんことを思はれ、只學問して、其智を人に  
まさらんと思ふべし。道を學ぶとならば善にはこらす輩

「免さいら  
入資者に  
財を出させ  
若者に奔走  
するなり

三

三

三

に争ふべからずといふことを知るべき故なり。大なる職  
をも辭し、利をも捨つるは、只學問の力なり。  
貧しき者は財をもちて禮とし、老たる者は力をもて禮と  
す。おのが分を知りて及ばざる時は、速にやむを智とい  
ふべし。免さいらんは人の誤なり。分を知らずして強ひて  
勵むは、おのれがあやまりなり。貧しくて分を知らざれば  
盗力衰へて分を知らざれば病を受く。  
鳥羽の作道は、鳥羽殿建られて後の號には非ず。昔よりの  
名なり。元良親王、元日の奏賀の聲甚殊勝にして、大極殿よ  
り鳥羽の作道迄聞えけるよし。李部王の記に侍るとかや。  
夜の御殿は東御枕なり。大方東を枕として、陽氣をうくべ  
き故に、孔子も東首し給へり。寢殿のしつらひ。或は東枕常  
つれく草

の事なり。白河院は北首に御寝なりけり。北はいむことなり。又伊勢は南なり。大神宮の御方を御跡にせさせ玉ふこと。いがかゝと人申しけり。但大神宮の遙拜は辰巳に向はれ給ふ。南にはあらず。

三

「三昧他念なく勤むるを云ふ」

高倉院の法花堂の三昧僧何某の律師とかやいふもの。或時鏡を取りて顔をつくく。と見て、我形の見悪く淺ましきことを、餘りにこゝろうくおぼえて鏡さへ疎ましきこと。ちしければ、其後永く鏡を恐れて手にだにとらず、更に人に交ることなし。御堂の勤めばかりに逢ひて、籠居たりと聞き侍りしこそ、有がたく覺えしか。

三

賢げなる人も、人の上をのみ量りて己をばしらざるなり。我をしらずして外をしるといふ理あるべからず。されば

己を知るを物知れる人といふべし。形見悪けれどとも知らず、心の愚なるをも知らず、藝の拙きをも知らず、身の數ならぬをも知らず、年の老ぬるをも知らず、病の冒すをも知らず、死の近き事をも知らず、行ふ道の至らざるをも知らず、身の上の非をも知ねば、増して外の謗りをしらす。但形は鏡に見ゆ。年は數へて知る。我身の事知らぬにはあらぬ。とすべき方のなければ、しらぬに似たりとぞいはまし。貌を改め、齡を若くせよとにはあらず。拙をしらば、なんぞやがて退かざる。老ぬと知らば、なんぞ閑に身を安くせざる。行ひ愚なりと知らば、何ぞ是を思ふこと。是にあらざる都て人に愛樂せられずして、衆に交はるは恥なり。形見悪く心おくれにして出て仕へ、無智にして大才にまじはり、不

「愛樂人よ  
り願ひ好ま  
るゝ也」

堪の藝をもちて堪能の座につらなり雪の頭をいたいき  
 て盛りなる人に並び況や及ばざることを望み叶はぬこ  
 とをうれへ來らざることを待ち人に恐れ人に媚ぶるは  
 人の與ふる恥に非ず貪る心にひかれて自ら身をはづか  
 しむるなり貪ることの止まざるは命を終ふる大事今こ  
 こにきたれりとたしかに知らざればなり。  
 資季大納言入道とかや聞えける人具氏宰相中將に逢ひ  
 てわぬしの問はれん程のこと何事なりとも答へ申さ  
 らんやといはれければ具氏いかゞ侍らんと申されける  
 をさらばあらがひ玉へといはれて墓々しき事は片端も  
 まねび知り侍らねば尋ね申すまでもなし何となきそい  
 る言の中におぼつかなき事をこそ問ひ奉らめと申され

三

「供御」負け  
 たる方より  
 葉子など  
 振舞を云  
 一馬のきつ  
 りやう云  
 々々古來  
 りいひ來  
 たる世話  
 なるべし  
 味分らず

けり増してこゝもとの淺き事は何事なりとも明らめ申  
 さんといはれければ近習の人々女房なども興あるあら  
 がひなり同じくは御前にて諍はるべし負けたらん人は  
 供御をまうけらるべしと定めて御前にて召合せられた  
 りけるに具氏幼くより聞きならひ侍れど其心しらぬこ  
 と侍り馬のきつりやうきつにのをか中くばれいりくれ  
 んごうと申す事はいかなる心にか侍らん承らんと申さ  
 れけるに大納言入道はたと詰りて是はそいろことなれ  
 ばいふにも足らずといはれけるを元より深き道は知り  
 侍らず坐事を尋ね奉らんと定め申しつと申されければ  
 大納言入道負けになりて所課厳しくせられたりけると  
 ぞ。



此供御は天子の御膳なり

厚茂故法皇の御前に候ひて、供御の参りけるに、今まいり侍る、供御の色々を文字も功能も尋ね下されて、空に申し侍らば、本草に御覽じ合せられ侍れかし、一つも申しあやまり侍らじと申ける、時しも六條故内府参り給ひて、有房序に物習ひ侍らんとて、先しほといふ文字は何れの篇にか侍らんと問はれたりけるに、土篇に候ふと申したりければ、才のほど既にあらはれにたり。今はさばかりにて候へゆかしきところなしと申されけるに、響みになりてまかりでにけり。

「響み」大に笑ふ聲なり

花は盛りに月は隈なきをのみ見る物かは、雨に向かひて月をこひ垂籠めて春のゆくゑしらぬも、猶あはれに情ふかし、咲きぬべきほどの梢、ちりしほれたる庭なごこそ見

所おほけれ、歌の詞書にも、花見に罷れりけるに、早く散り過にければとも、さはる事ありて罷らでなごも書るは、花を見てといへるに劣れることかは、花の散り月の傾くを、したふならひはさる事なれど、殊にかたくななる人ぞ、此枝かの枝散りにけり、今は見所なしなどはいふめる、萬の事も始終こそをかしけれ、男女の情も、ひとへに逢みるをばいふ物かは、あはでやみにしうきを思ひ、あだなる契をかこち、ながき夜を獨あかし、とをき雲井を思ひやり、あさちを宿に昔を忍ぶこそ、色このむとはいはめ、望月の隈なきを、千里の外まで詠めたるよりも、曉近くなりて待出たるが、いと心深く青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木のまの影、打ち時雨たる村雲がくれのほど、又な

月花を目に  
見ぬ心云  
ふは唯如  
月花の如  
花の句ひ  
月花の句  
もなてる  
りなひ

つれく草  
哀なり椎柴しらかしなどのぬれたるやうなる葉のう  
へにきらめきたるこそ身にしみて心あらん友もがなど  
都戀しうおぼゆれずべて月花をばさのみ目にて見る物  
かは春は家を立さらでも月の夜はねやの内ながらも思  
へるこそいと頼もしうおかしけれよき人は偏にすける  
さまにも見えす興するさまもなをざりなり片田舎の人  
こそ色こくよろづはもて興すれ花のもとにはねちより  
立よりあからめもせず守りて酒のみ連歌してはてはお  
ほきなる枝心なくおりとりぬ泉には手足さしひたして  
雪にはおりたちて跡つけなご萬の物余所ながら見る事  
なしさやうの人の祭見しさまいと珍らかなりき見事い  
と遅し其ほどは棧敷不用なりとて奥なる屋にて酒飲物

「さありか  
かり種々  
機に批判  
する機なり

「何さなく  
云々兼好  
が祭みたる  
より無常なる  
り感じたるな

くひ園碁双六など遊びて棧敷には人を置たれば渡り候  
ふといふ時に各々膽潰るゝやうに争そひ走りのぼりて  
おちぬべきまで簾はりいで、押あひつゝ、一事も見洩さ  
じと守りてとありかゝりと物ごとにいひて渡りすぎぬ  
れば又渡らんまでといひておりぬたゞ物をのみ見んと  
するなるべし都の人のゆゝしげなるは睡て最も見ず若  
く末々なるは宮仕へにたちる人の後に候ふは様悪くも  
及びかゝらずわりなく見んとする人もなし何となく葵  
かけ渡してなまめかしきに明はなれぬ程忍てよする車  
ごものゆかしきを其れか彼かなご思ひ寄すれば牛飼下  
部などの見知れるもありおかしくもさらしくも様  
々にゆきかふ見るも徒然ならずくるゝほどにはたてな

つれく草

らべつる車ども所なく並み居つる人も何方へか行つらん程なく稀になりて、車どものらうがはしさもすみぬれば、簾たゝみも取拂ひ、目の前にさびしげに成行くこそ、世の例しも思ひ知られて哀なれ。大路見たるこそ祭見たるにてはあれ。かの棧敷の前をこゝら往かふ人の見知れるが、あまた有るにて知りぬ。世の人數もさのみは多からぬにこそ。此人みな失せなん後、我身死ぬべきに定まりたりとも、程なく待ちつけぬべし。大きなる器物に水を入れて細き穴をあけたらんに、滴る事少なしといふとも、怠るまなくもりゆかば、頓てつきぬべし。都の中に多き人死ざる日は有るべからず。一日に一人二人のみならんや。鳥部野船岡、さらぬ野山にも、送る數多かる日はあれど、送らぬ日は

「舟岡」山城の野地なり

なし。されば棺を嚮もの作りて、打置ほごなし。若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり。今日まで遁れ來にけるは、有りがたき不思議なり。しばしも世を長閑には思ひなんや。繼子だてといふ物を、雙六の石にて作りて立並らべたる程は、とられん事、いづれの石とも知らぬ。ども、數へあて、一つを取りぬれば、其ほかは遁れぬと見れど、又々數ふれば、かれこれまぬき行く程に、何れも遁れざるに似たり。兵の軍に出るは、死に近き事を知りて、家をも忘れ、身をも忘る。世をそむける草の庵には、靜に水石を弄びて、是をよそにきくと思へるはいとかなし。靜なる山のおく、無常の敵さほひ來たらざらんや。其死に臨める事、いくさの陣にすゝめるにおなじ。

祭過ぬれば、後の葵不用なりとて、ある人の御簾なるを皆取せられ侍しが、色もなく覺え侍しを、よき人の仕給ふ事なれば、さるべきにやと思ひしかど、周防内侍がかくれどもかひなき物は、諸共に御簾の葵の枯葉なりけりと讀るも、母屋の御簾に葵のかゝりたる枯葉を讀るよし、家の集にかけり古き歌の詞書に、枯たる葵にさして遣はしけるとも侍り、枕草子にも、越し方戀しきもの、枯たる葵とかけるこそ、いみじくなつかしう思ひよりたれ、鴨長明が四季物語にも、玉だれに後の葵はとまりけりとぞかける己ど枯るゝだにこそあるを、名残なくいかゞとり捨つべき、御帳にかゝれる薬玉も、九月九日菊に取換へらるゝといへば、菖蒲は菊の折りまでもあるべきにこそ、枇杷皇太后宮

かくれ給てのち、ふるき御帳のうちに、菖蒲薬玉などの枯れたるが侍けるを見てをりならぬ、ぬを猶ぞかけつる、と辨のめのどのいへる返事に、あやめの草はありながらとも、江の侍従がよみしぞかし。  
家に有りたき木は、松櫻松は五葉もよし、花は一重なるよし、八重櫻は奈良の都にのみ有けるを、此頃ぞ世に多く成侍るなる。吉野の花、左近の櫻、皆一重にてこそあれ、八重櫻は、異様の物なり。いどころちたくねぢけたり。植へずとも有なん、遅櫻又すさまじ。蟲のつきたるもむづかし。梅は白き、薄紅梅、一重なるがとく咲たるも、重なりたる、紅梅の、匂ひめでたきもみなおかし。をそき梅は櫻にさきあひて、おぼえ劣りけをされて、枝に萎みつきたる心うし。一重なるが

「こちたく」  
「事痛くなり」  
「れり戻りた」  
「る意」  
「けなされし」  
「氣衰れども」  
「書きて氣を」  
「奪はるゝが」  
「如き也」

先咲きて散りたるは、心とくおかしとて、京極入道中納言  
 は、猶一重梅をなん軒ちかく植へられたりける、京極の屋  
 の南むきに、今も二本侍るめり、柳又おかし、卯月ばかりの  
 若楓、すべて萬の花紅葉にもまさりてめでたき物なり、橘  
 花桂、いづれも木は物ふりおほきなるよし、草は山吹、藤、杜  
 若なでしこ、池には蓮、秋の草は萩、薄さちかう、萩、女郎花、ふ  
 ぢばかましをに、われもかう、荳、りんだう、きく、黄菊も、葛  
 葛、朝顔、いづれもいと高からず、さゝやかなる垣に繁から  
 ぬよし、此外世に稀なる物、唐めきたる名の聞きにくく、花  
 も見馴れぬなど、いとなつかしからず、大方なにも珍らし  
 く有りがたき物は、善からぬ人のもて興ずる物なり、さや  
 うの物なくてありなん。

三

「口をし、苦  
 々し、残念な  
 る意なり」

身死して財残る事は、智者のせざる處なり、よからぬ物貯  
 へ置きたるもつたなく、よき物は心をとめけんとはか  
 なし。こちたくおほかるまして口をし、我こそえめなごい  
 ふ者ども有りて、跡に争ひたるさまあし、後は誰にと心ざ  
 す物あらば、いけらん内にぞ譲るべき、朝夕なくて協はざ  
 らんものこそあらめ、其外は何も持たでぞあらまほしき。  
 悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦の何某とかや、さうなき  
 武者なり、故郷の人の來りて、物語すとて、あづまの人こそ  
 いひつる事は頼まるれ、都の人は言請のみよくて、實なし  
 といひしを、聖それはさこそ思すらめども、己は都に久し  
 くすみて、なれて見侍るに、人の心劣れりとは思ひ侍らず。  
 並べて心柔かに情ある故に、人のいふほどの事、けやけく

三

「悲田院」病  
 者孤者を施  
 養する所な  
 り

「けやけく」  
 甚しき義な  
 り

否いなびがたくて萬よろづ言ことひはなたず心よわくことうけしつ  
 偽いつはりりせんとは思はぬぞとほしくかなはぬ人のみあれば自  
 ら本意ほんい透とほらぬ事多おほかるべし。あづま人は我方わがたなれどげに  
 は心の色いろなくなさけをくれ偏ひとへにすぐよりなるものなれ  
 ば初はじめよりいなといひてやみぬ賑にぎひ寛ゆたなれば人ひとには頼たの  
 まるゝぞかしたとことわられ侍しこそ。此こゝひじりこそ打うゆ  
 がみ荒あ々しくて聖教しやうきやうの細こまやかなる理ことばりいとわきまへす  
 もやと思ひしに此こゝ一言ひとことの後心のちにくゝなりて多おほかる中なかに  
 寺てらをも住持ぢゆうぢせらるゝはかく柔やわぎたる所有しゆりやうりて其益そのえきも有あ  
 るにこそと覺おぼえ侍りし。

心なしと見ゆるものもよき一言ひとことはいふものなり。ある荒あ  
 るびすの恐おそろしげなるがたかたへにあひて御子ごしはおはす

一四

「するすみ」  
 白氏文集はくしやうもんじふに  
 匹ひと如ごと身みとあ  
 り沙さ石いし集しふに  
 人の一ひと物ものを  
 手に持もた  
 行ゆく  
 詳こまな  
 らず

やと問とひしに一人ひとも持もち侍まらすと答こたへしかばさては物  
 の憐あはれは知しり給たまはじ情なさけなき御心ごしんにぞ物ものし給たまふらんといと  
 おそろし。子こゆへにこそ萬よろづのあはれは思おもひしらるれとい  
 ひたりし。さもありぬべき事ことなり。恩愛おんあいの道みちならでは、かゝ  
 る者ものの心こゝろに慈悲じひありなんや。孝養かうやうの心こゝろなき者ものも、子こもちて  
 こそ親おやの志こゝろざしは思おもひ知るなれ。世よを捨すたる人ひとのよろづにす  
 るすみなるが、なべて羈は多おほかる人ひとの萬よろづに諂へつらひ望のぞふかき  
 を見て、無下むげに思おもひくだすはひが事ことなり。其人そのひとの心こゝろになり  
 て思おももへば誠まことにかなしからん。おやのため妻子さいしのため  
 は恥はをかもわすれぬすみもしつべき事ことなり。されば盗人ぬすを  
 戒いめ、僻事ひがことをのみ罪つみせんよりは、世よの人ひとの飢うす寒さむからぬや  
 うに、世よをばおこなはまほしきなり。人恒つねの産うなき時ときはつ

つれく草

ねの心なし人窮りて盗みす。世治らずして、凍餒の苦しむ  
 あらば、科の者絶ゆべからず。人をくるしめ法を犯さしめ  
 て、夫をつみなはん事不便のわざなり。さていかがして人  
 を恵むべきとならば、上の奢り費す所をやめ、民をなで農  
 をすゝめば、下に利あらん事疑ひあるべからず。衣食尋常  
 なる上に、僻事せん人をぞ誠の盗人とはいふべき。

一聖

人の終焉のありさまの甚じかりし事など、人の語るを聞  
 くに、惟静にして亂れずといはいは、心にくかるべきを恐な  
 る人は、怪しくことなる相を語り告げ言ひし詞もふるま  
 ひも、をのれが好む方にはめなすこそ、其人の日頃の本意  
 にも非ずやとおぼゆれ。此大事は權化の人も定むべから  
 ず。博學の士も量るべからず。己たがふ所なくば人の見聞

「終焉」臨終  
 の際を云ふ  
 なり

一聖

くにはよるべからず。

「宿執開發」  
 前生にてな  
 したる功德  
 の開發した  
 るなり

扨尾の上人道を過ぎ給ひけるに、河にて馬あらふ男足々  
 といひければ、上人立とまりて、あな尊とや宿執開發の人  
 かな、阿字く〜と唱ふるぞや、いかなる人の御馬ぞ、餘りに  
 たうとくおぼゆるはと尋ね給ひければ、府生殿の御馬に  
 候ふと答へけり。こはめでたき事かな、阿字本不生にこそ  
 あなれ、うれしき結縁を申つるかなとて、感涙をのこはれ  
 けるとぞ。

一聖

御隨身、秦重躬北面の下野入道、信願を落馬の相有る人な  
 り、能々慎み給へといひけるを、いと誠しからず思ひける  
 に、信願馬より落ちて死にけり。道に長じぬる一言神の  
 ごとしと、人思へり。さていかなる相ぞと人のとひければ、

「桃尻」桃の如き尻にて  
戦の定まらぬ  
ぬをいふ  
べし

つれ／＼草

一一三

一見  
二言  
三鹿茸

きはめて桃尻にして、沛艾の馬を好みしかば、此相をおほせ侍りきいつかは申し誤りたるぞぞいひける。  
明雲座主相者にあひ給ひて己若し兵杖の難やあると尋ね給ひければ、相人實に其相御座すと申す。いかなる相ぞと尋ね給ひ給れば、傷害の恐れおはしますまじき御身に、假にもかくおぼしよりて尋ね給ふ。是既に其危みのきざしなりと申しけり。果して矢に中りてうせ給ひにけり。灸治あまた所になりぬれば、神事に穢れありといふ事、近く人のいひ出せるなり。格式等にも見えすとぞ。  
四十以後の人、身に灸をくはへて三里をやかざれば、上氣の事あり。必灸すべし。  
鹿茸を鼻にあて、嗅ぐべからず。ちいさき虫ありて、鼻よ

「堅固」堅く  
由其事の自  
り片帆は眞  
帆の反語を  
しな未だ十  
分なるぬを

一三

り入りて腦をはむといへり。  
能をつかんとする人、よくせざらん程は、慙に人にしられじ。内々よく習ひ得てさし出たらんこそ、いと心にくからめと、常にいふめれど、かくいふ人、一藝もならひ得る事なし。いまだ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて、誇り笑はるゝにも恥ぢず、つれなく好きて嗜む人、天性其骨なけれども、道に泥ます。猥りにせずして、年を送れば、堪能のたしなまざるよりは、遂に上手の位にいたり、徳たけ人にゆるされて、双なき名をうる事なり。天下の物の上手といへども、始は不堪の聞えもあり、無下の瓊もありき。されども、其人、道のをきて正しく、是を重くして、放埒せざれば、世の博士にて、萬人の師となる事、諸道換るべからず。

つれ／＼草

一一三



「あいななくし  
何のかひも  
なくなり」

つれく草

或人の曰年五十になるまで上手にいたらざらん藝をば  
捨つべきなりはげみ習ふべき行末もなし老人の事をば  
人もえ笑はず衆に交りたるもあいななくみぐるし大方よ  
ろづのしわざはやめて暇あるこそめやすくあらまほし  
けれ世俗の事に携りて生涯をくらすは下愚の人なりゆ  
かしく覺えんことは學び聞くとともに其趣をしりなばおぼ  
つかなからずしてやむべしもとより望むことなくして  
やまんは第一の事なり。  
西大寺靜然上人腰かゝまり眉しろく誠に徳たけたる有  
様にて内裏へ参られたりけるを西園寺内大臣殿あな尊  
の氣色やとて信仰の氣色ありければ資朝卿これと見て  
年のよりたるに候ふと申されけり後日に獲犬の淺まし

「此人資朝  
卿をさす也」

く老さらばひて毛はげたるをひかせて此氣色たうとく  
見えて候ふとて内府へ参せられたりけるとぞ。  
爲兼大納言入道召捕られて武士共打圍みて六波羅へあ  
て行きければ資朝卿一條渡りにて是を見てあな羨まし  
世にあらん思出斯くあらまほしけれとぞいはれけり。  
此人東寺の門に雨宿りせられたりけるに片輪者どもの  
集り居たるが手も足もねぢゆがみうちかへりていづく  
も不具に異様なるを見てとりくになぐひなき癖者な  
り尤愛するに足れりと思ひて守り給ひけるほどに頓て  
其興つきて見悪くいぶせく覺えければたゞ素直に珍ら  
しからぬものにはしかかと思ひて歸りて後この間植木  
を好みてことやうに曲折あるを求めて目を悦ばしめつ  
つれく草

るは彼かたわものを愛するなりけりと興なくおぼえければ鉢にうへられける木どもみな堀りすてられにけり。さも有りぬべきことなり。

三

世に随はん人は先機嫌をしるべし序あしきことは人の耳にも逆ひ心にも違ひて其事ならずさやうの折節を心得べきなり但病をうけ子うみ死ぬる事のみ機嫌をはからずついであしとてやむことなし生住壊滅のうつりかはる眞の大事はたけき河の漲り流るゝがごとししばしも滞らず直に行ひゆくものなりされば眞俗につけて必ず果し遂げんと思はん事は機嫌をいふべからず。どかくの用意なく足をふみ止むまじきなり春くれて後夏になり夏はで、秋のくるにはあらず春は頓て夏の氣を催し、

つはるる孕の始兆なり  
籠りにひて腹  
事なりなる

二

「大變」大臣  
にたりたる  
時の披露の  
宴會なり

夏より既に秋は通ひ秋は則寒くなり。十月は小春の天氣、草も青くなり梅も苔みぬ。木葉の落つるも先落ちてめぐむにはあらず下よりきざしつはるに耐へずして落つるなり迎ふる氣下に設けたる故に待ちとる序甚はやし生老病死のうつり來ること、又是に過ぎたり。四季は尙定まれるついであり死後は序をまたず死は前よりしも來らず、かねてうしろにせまれり。人皆死あることをしりて待ことしかも急ならざるにおぼえずして來る沖の干潟遙なれども磯より潮の満るが如し。

大臣の大變は、然有るべき所を申しうけて行ふ常の事なり。宇治左大臣殿は、東三條殿にておこなはる。内裏にてありけるを申されけるによりて、他所へ行幸ありけり。させ

ることのよせなければども、女院の御所など借り申す故實なりとぞ。

一五  
「攤」雙六の類なり

筆をとれば物かゝれ、樂器をとれば音をたてんと思ふ。盃をとれば酒を思ひ、采をとれば攤打たんことを思ふ。心は必ず事に觸れてきたる假にも不善の戯れをなすべからず。あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。卒爾にして多年の悲を改むることもあり、假に今此文を擴げざらましかば、此事をしらんや。是則ふるゝ所の益なり。心更に起らずとも、佛前に有りて、珠數をとり、經をとらば、怠るうちにも善業自ら修せられ、散亂の心ながらも、繩床に坐せば、覺えずして禪定なるべし。事理素より二ならず、外相もし背かざれば、内證必ず熟す。強ひて不信

「あからさま」假初チヨツトの間

「繩床」禪家の具なり

一六

「そ」を捨つる「盃」の當に「残」りある酒を捨るなり

といふべからず。仰ぎて是をたふとむべし。

盃のそこをすつることはいかゞ心得たると、或人の尋ねさせ給ひしに、疑當と申し侍るは、そこに凝りたるを捨つるにや候ふらんと申し侍りしかば、さにはあらず。魚道なり、流を残して口のつきたる所をすゝぐなりとぞおほせられし。

一七

みなむすびといふは、糸を結び重ねたるが、蟻といふ貝に似たれば、いふとあるやんごとなき人仰せられき。になといふは、あやまりなり。

一八

門に額懸るを、打つといふは、よからぬにや、勘解由小路の二品禪門は、額かくるとのたまひき見物の棧敷うつもよからぬにや、平張りうつなどは、つねの事なり。さじき構ふ

るなごいふべし護摩たぐいふもわろし修する護摩するなごいふなり行法も法の字をすみていふわろし濁りていふと清閑寺僧正仰られきつねにいふことにかゝることのみおほし。

「時正」後岸の中日なり

一三

花の盛は冬至より百五十日とも時正の後七日ともいへど立春より七十五日大様たがはず。

一四

遍照寺の承仕法師池の鳥を日頃かひつけて堂の内まで餌をまきて戸ひとつあけたれば數もしらず入りこもりける後己も入りて立籠めて捕へつゝ殺しける粧ほひおごろくしく聞えけるを草刈る童きゝて人に告げれば村のをのこどもおこりて入りて見るに大鴈どもふためきあへる中に法師交りて打ふせ捏ころしければ此法

「ふためき」逃走なり

「使廳」操非遣使廳なり

師を捕へて所より使廳へ出したりけり殺す所の鳥を頸にかけさせて禁獄せられにけり基俊大納言別當の時になん侍りける。

「太衝」九月の異名なり

一五

太衝の太の字點打つうたすといふ事陰陽の輦相論のこど有りけり守近入道申し侍りしは吉平が自筆の占文の裏にかゝれたる御記近衛關白殿にあり點うちたるを書たりと申しき。

一六

世の人相逢ふ時暫くも黙止することなし必ず言葉あり其ことを聞くに多くは無益の談なり世間の浮説人の是非自他のために失おほく得すくなし是を語る時互の心に無益の事なりといふことを知らず。

一七

吾妻の人の都の人に交り都の人の吾妻に行きて身をた

て又本寺本山をはなれぬる顯密の僧すべて我俗にあら  
ずして人にまじはれる見苦し。

一六

人間の營みあへる業をみるに、春の日に雪佛を作りて、其  
爲に金銀珠玉の飾をいとなみ、堂塔をたてんとするに似  
たり。其構へをまちてよく安置してんや。人の命有りて見  
る程も下よりきゆる事雪の如くなる内に、いとなみ待つ  
こと甚おほし。

一七

一道に携る人、あらぬ道の筵にのぞみて、憐れ我道ならま  
しかば、かくよそに見侍らじものををといひ、心にも思へる  
こと常のことなれど、よに悪くおぼゆるなり。知らぬ道の  
羨しく覚えば、あなうらやまし、なごか習はざりけんとい  
ひてありなん。我智をとり出て人に争ふは、角あるもの、

「老の方人」  
「老功ある方」  
「老なる方」  
「老なる方」

一七

角を傾け、牙あるもの、牙をかみいだすたぐひなり。人さ  
しては善にはこらず、物とあらそはざるを徳とす。他に勝  
ることのあるは、大なる失なり。品の高さにては、才藝の勝  
れたるにては、先祖の譽れにては、人にまされりと思へる  
人は、譬ひ詞に出てこそいはねども、内心に若干の科あり、  
慎みて是をわするべし。嗚呼にも見え、人にもいひけたれ、  
禍ひをも招くはたゞ此慢心なり。一道にも誠に長じぬる  
人は、自ら明かに其非を知る故に、志常にみたずして、つひ  
にもものに誇る事なし。  
年老いたる人も、一事に俊れたる才能有りて、此人の後に  
は誰にか問はんなどいはるゝは、老のかたうごにて生け  
るもいたづらならず。さはあれど、其も廢れたる所のなき

「したり顔」  
知り得たる  
顔なり

は、一生此事にて暮れにけりと拙なく見ゆ、今は忘れにけりといひて有りなん。大方は知りたりとも、漫にいひちらすは、さばかりの才にはあらぬにやと聞え、自ら誤りもありぬべし。さだかにも辨へ知らずなごいひたるは、猶眞に道の主ともおぼえぬべし。ましてしらぬこと、したり顔におとなしくもごきぬべくもあらぬ人のいひ聞かするを、さもあらずと思ひながら、聞き居たるいとわびし。何事の式といふことば、後嵯峨の御代まではいはざりけるを、近き程よりいふ詞なりと人の申し待りしに、建禮門院の右京太夫、後鳥羽院の御位の後、又内住みしたること、をいふに、世の式もかはりたることはなきにもと書きたり。

一三

「心つきな  
き」客を取  
持つ事の取  
都合なるな  
り

昔阮籍は俗  
人なれば白  
にて見風人  
をば青眼に  
て見たり  
り云ふ事な

一三

然爲たることなくて、人の許ゆくはよからぬ事なり。用ありて行きたりとも、其事はてなば疾く歸るべし。久しく居たるいとむづかし。人と向ひたれば、詞おほく、身もくたびれ、心も静ならず。萬の事さはりて時をうつす。互のため益なし。厭はしげにいはんもわろし。心づきなきことあらん折は、中々其由をもいひてん。同じ心にむかはまほしく思はん。人のつれくにて、いましばし、今日は心静になごいはん。はこの限りにはあらざるべし。阮籍が青き眼誰もあるべき事なり。其事となき人に來りて、長閑に物語して歸りぬるいとよし。又文も久しく聞えさせぬばなごばかりいひおこせたる、いとうれし。貝を覆人の我前なるをばおきて、餘所をみわたして、人の

一三

「わりなく」  
無理にする  
なり

「ひじりめ」  
碁に云ふ聖  
目の事なる  
べし

袖の影膝の下まで目を配るまに前なるをば人に掩はれぬ。よくおほふ人はよそまでわりなく取るとは見えずして、近きばかり覆ふやうなれど、多くおほふなり。碁盤のすみに石を立てはじくにむかひなる石を守りてはじくは當らず、我手許をよくみて、こゝなるひじりめをすぐにはじけば、たてたる石必ずあたる。萬の事外にむきて求べからず、只こゝもとを正しくすべし。清献公が詞に、好事を行じて前程をさふことなかれといへり。世を保たん道もかくや侍らん。内を慎まず、軽く愆しまゝにしてみだりなれば、遠國必ず背く時、初めて謀をもとむ風にあたり、濕に臥して病を神靈に訴ふるは、愚なる人なりと、醫書にいへるが如し。目の前なる人の愁をやめ、恵を施し、道を正しく

一語

せば、其化遠く流れんことを知らざるなり。禹の行きて三苗を征せしも、軍をかへして徳を敷くにはしかざりき。若き時は血氣うちにあまり、心物に動きて情欲おほし。身を危ぶめて碎け易きこと、珠を走らしむるに似たり。美麗を好みて寶を費し、是を捨て、苔の袂にやつれ、勇める心盛りにしてもの争ひ、心に恥羨み、好む所日々に定らず。色にふけり情にめで、行を潔くして百年の身をあやまり、命を失へるためし願はしくして、身の至く久しからん事をば思はず、すける方に心ひきて、永き世語りともなる。身をあやまつ事は若き時の爲業なり。老いぬる人は精神衰へ、淡く疎かにして、感じ動く所なし。心自らしづかなれば、無益のわざをなさず、身をたすけて愁なく、人の煩ひなかつれく草

らんことを思ふ。老いて智の若き時に勝れること、若くして形の老たるにまされるが如し。

小野小町がこと極めてさだかならず。おそろへたるさまは、玉造といふ文にみえたり。此文清行がかけりといふ説あれど、高野大師の御作の目録に入れり。大師は承和のはじめにかくれ給へり。小町が盛りなること其後のことにや、猶おぼつかなし。

小鷹によき犬大鷹につかひぬれば、小鷹にわろくなるといふ。大につき小をすつる理り、誠に然なり。人事多かる中に、道を楽しむより氣味深きはなし。是實の大事なり。一たび道を聞きてこれに心ざらん人、何れのわざか廢れざらん。何事をかいとなまん。愚なる人といふとも賢き犬の心に

おとらんや。

世には心えぬ事の多きなり。でもあるごとには、先酒を勧め強ひのませたるを興とすること、いかなる故とも心えず。飲む人の顔いと耐へがたげに眉をひそめ、人めを謀りて捨てんとし、逃んとするを捕へて、引止めて漫に飲ませつれば、うるはしき人も忽に狂人となりて、をこがましく、息災なる人も目前に大事の病者となりて、前後もしらず。仆れふす祝ふべき日などは、淺ましかりぬべし。明る日まで頭いたく、物くはずによひふし、生を隔てたるやうにして、昨日の事覚えす、公私の大事をかきて煩ひとなる。人をしてかゝるめを見すること、慈悲もなく禮義にも背けり。かく辛きめにあひたらん人、妬く口をしと思はざらんや。



人の國にかゝる習ひ有るなりと、これらになき人事にて、  
 傳へ聞きたらんは、怪しく不思議におぼえぬべし。人の上  
 にて見たるだに心うし思ひ入りたるさまに心にくしと  
 見し人も、思ふ所なく笑ひ罵り、詞おほく烏帽子ゆがみ紐  
 はづし、脛たかくかゝげて用意なき氣色、日頃の人ともお  
 ぼえず。女は額髪はれらかにかきやり、まばゆからず顔う  
 ちさゝげて打笑ひ、盃持てる手にとりつき、よからぬ人は  
 肴取りて口にさしあて、自らも食ひたるさまあし。聲の限  
 り出して、各誂ひ舞ひ、年老いたる法師召出されて、黒くさ  
 たなき身を肩ぬぎて、目もあてられすすちりたるを興じ  
 見る人さへうとましくにくじ。あるは又、我身いみしき事  
 ども、片腹いたくいひきかせ、あるは酔ひ泣きし下さまの

「まばゆからず」恥か  
 なりしからぬ體

「すすり」す  
 ちりもちり  
 して正體な  
 き様なり

「あもいばは」  
 嘔吐又或はば  
 小便等するはば  
 也

人はのりあひいさかひて、あさましくおそろしく恥がま  
 しく心憂きことのみ有りて、果ては許さぬものごも押取  
 りて、椽よりおち、馬車よりおちて過ちしつものにも乗ら  
 ぬ際は、大路をよるばひ行きて、ついち門の下などに向き  
 て、えもいはぬ事共しちらし、年老い袈裟掛けたる法師の  
 小童の肩をおさへて、聞えぬ事ごもいひつゝ、よろめきた  
 る、いとかはゆし。かゝることをしても、此世も後の世も、益  
 あるべき業ならばいかいはせん。此世には過ちおほく財  
 を失ひ病をまうく、百薬の長とはいへど、萬の病は酒より  
 こそおこれ、愁を忘るといへど、酔ひたる人ぞ、過にし憂を  
 も思ひ出て泣くめる。後の世は人の智慧を失ひ、善根をや  
 くこと火の如くして、惡をまし、よろづの戒を破りて地獄  
 つれく草

に墮つべし。酒を取りて人にのませたる人、五百生が問手  
 なき者に生るとこそ、佛は説き給ふなれ。かくうごましと  
 思ふものなれど、自ら捨てがたきをりもあるべし。月の夜  
 雪の朝花の下にても、心長閑に物語して盃出したる、萬の  
 興をそふるわざなり。つれくなる日、思ひの外に友の入  
 りきて執り行ひたるも、心慰むなれくしからぬあたり  
 の御簾の中より、御菓物御酒など、よき様なるけはひして、  
 さし出されたるいとよし。冬狭き所にて、火にて物いりな  
 ざして、隔てなきごち指向ひて、多くのみたるいとおかし。  
 旅のかり屋、野山などにて、御肴何かななどいひて、芝の上  
 にて飲みたるもおかし。痛ういたむ人の、強ひられてすこ  
 し飲みたるもいとよし。よき人のとりわきて、今一つ上す

「痛ふいたむ人」  
 「酒にたむ人」  
 「よき人」

「顔はれたる顔」  
 「顔はれたる顔」  
 「顔はれたる顔」

「料事な事」  
 「料事な事」  
 「料事な事」

一先

一先

くなしなど宣はせたるもうれし。近付かまほしき人の上  
 戸にて、びしくとなれぬる又うれし。さはいへど、上戸は、  
 おかしく罪ゆるさるゝものなり。酔ひくたびれて朝寐し  
 たる所を、主の引き明けたるに、惑ひてぼれたる顔ながら、  
 細き髻さし出し、物も着あへず抱きもち、ひきしろひてに  
 ぐるかひどりすがたのうしろ手、毛生ひたる細脛のほご  
 おかしくつきくし。  
 黒戸は小松御門位につかせ給ひて、昔直人におはしまし  
 し時、まさな事せさせ給ひしを忘れ給はで、常にいとなま  
 せ給ひける間なり。御薪にすゝけたれば、黒戸といふとぞ。  
 鎌倉の中書王にて御鞆有けるに、雨ふりて後、いまだ庭の  
 かはかざりければ、いかいせんと沙汰有りけるに、佐々木

隱岐入道鋸の屑を車につみて、多く奉りたりければ、一庭  
 に敷かれて、泥土の煩ひなかりけり。取りためけん用意あ  
 りがたしと、人感じあへりけり。此事を或者の語り出でた  
 りしに、吉田中納言の、乾砂子の用意やはなかりけると宣  
 ひたりしかば、恥しかりき。いみじと思ひける。鋸の屑賤し  
 く異様の事なり。庭の儀を奉行する人、かはき砂子をまう  
 くるは、故實なりとぞ。  
 或所の侍ども、内侍所の御神樂を見て、人にかたるとて、寶  
 劍をば其人ぞ持ち給へるなごいふを聞きて、内なる女房  
 の中に、別殿の行幸には、晝御座の御劍にてこそあれと、忍  
 びやかにいひたりし。心憎くかりき。其人ふるき典侍なり  
 けるとかや。

二五

江帥大江  
匡房なり

さぎちやうは、正月に打たるさぎちやうを、眞言院より神泉  
苑へ出して、焼きあぐるなり。法成就の池にこそとはやす  
は、神泉苑の池をいふなり。

二六

入宋の沙門道眼上人、一切經を持來して、六波羅のあたり  
 やけ野といふ所に安置して、殊に首楞嚴經を講じて、那蘭  
 陀寺と號す。其聖の申されしは、那蘭陀寺は、大門北むきな  
 りと、江帥の説とていひ傳へたれど、西域傳法顯傳なごに  
 も見え、更に所見なし。江帥は、いかなる才覺にてか申さ  
 れけん、おぼつかなし。唐土の西明寺は、北むき、勿論なりと  
 申しき。  
 左義長  
 さぎちやうは、正月に打たるさぎちやうを、眞言院より神泉  
 苑へ出して、焼きあぐるなり。法成就の池にこそとはやす  
 は、神泉苑の池をいふなり。  
 ふれくこ雪たんばのこ雪といふ事、米搗きふるひたる  
 に似たれば、粉雪といふたまれこ雪といふべきを誤りて  
 つれく草

たんばのとはいふなり垣や木の杈にとうたふべしとあるものしり申しき昔より言ひけるとにや鳥羽院幼なくおはしまして雪の降るにかく仰せられけるよし讃岐典侍が日記に書きたり。

「からさけ」  
「乾れる蛙なり」

四條大納言隆親卿からさけといふ物を供御に参らせられたりけるをかく怪しきもの参るやうあらじと人の申しけるを聞きて大納言蛙といふ魚まいらぬことにてあらんにこそあれ蛙の素干何條事かあらん鮎の素干は参らぬかはと申されけり。  
人突く牛をば角をきり人食ふ事をば耳をきりて其しるしとすしるしをつけずして人を破らせぬるは主の科なり人くふ犬をば養ひ飼ふべからず是みな科あり律の禁

二五

なり。

「けいめい」  
「敬命又は經營も書き其日の事を司るなり」  
「給はりて御用事を己に給はりてなり」

二五

相摸守時頼の母は松下禪尼とぞ申しける守をいれ申さるゝ事有りけるにすゝけたるあかりさうじの壞ればかりを禪尼手自ら小刀してきりまはしつゝはられければせうどの城介義景其日のけいめいして候ひけるが給はりて何某男にはらせ候はんさやうの事に心得たる者に候ふと申されければ其男尼が細工によもまさり侍らじさて猶一間づゝはられけるを義景みなを張かへ候はんは遙に容易く候ふべし斑に候ふも見苦しくやと重ねて申されければ尼も後はさは〜とはりかへんと思へども今日ばかりはわざとかくて有るべきなり物は破たる所ばかりを修理して用ゐる事ぞと若き人に見慣はせて

心付けんためなりと申されける、いと有難かりけり。世を治むる道、儉約を本とす。女姓なれども、聖人の心に通へり。天下を保つほどの人を子にてもたれける。誠にたゞ人に

一六

「鞍を置換へしは餘の馬にしかりなり」

城陸奥守泰盛は、さうなき馬乗りけり。馬を引き出させけるに、足を揃へて鬪をゆらりと越ゆるを見ては、是は悍める馬なりとて、鞍を置換へさせけり。又足を伸べてしきみに蹴あてぬれば、是はにぶくして過ちあるべしとて、乗らざりけり。道を知らざらん人、かばかりおそれなんや。吉田と申す馬乗りの申侍りしは、馬毎にこはきものなり。人の力争ふべからずと知るべし。乗るべき馬をば先よくみて、強き所弱き所を知るべし。次に轡鞍の具に危きこと

一七

「強き弱きは左右の口なり」

やあると見て、心に懸ることあらば、其馬を馳すべからず。此用意を忘れざるを、馬乗とは申すなり。是秘藏のことなりと申しき。

一八

「非家」専門家にあらざるを云ふ

萬の道の人の例、不堪なりといへども、堪能の非家の人に并ぶ時、必ず勝ることとは、たゆみなく慎みて、軽々しくせぬと偏に自由なるとのひとしからぬなり。藝能所作のみにあらず、大方の振舞心遣ひも、愚にして謹めるは得の本なり。巧にしてほしきまゝなるは失の本なり。

一九

或者子を法師になして、學問して因果の理をもしり、説經などして、世渡るたづきともせよと言ひければ、教のまゝに説經師にならんために、先馬に乗り習ひけり。輿車もたぬ身の導師に請せられん時、馬なご迎へにおこせたらん

「不興な  
く」  
「早歌」  
の類なるべ

「未の如  
すべし」  
「心を  
なすべし」  
「事なり」

に、桃尻にて落ちなんは心憂かるべしと思ひけり。次に佛  
事の後酒など勸むるとあらんに、法師の無下に能なきは、  
檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふことをならひ  
けり。二つの業漸々境に入りければ、いよくよくしたく  
覚えて嗜みけるほごに、説經ならふべきひまなくて年よ  
りにけり。此法師而已にもあらず、世間の人並べて此事あ  
り。若き程は諸事につけて身を立て、大なる道をも成し、能  
をもつき、學問をもせんと、行末久しくあらます事共、心に  
は掛けながら、世を長閑に思ひて打怠りつゝ、先指當りた  
る目の前の事にのみまぎれて、月日をおくれば、事毎にな  
すことなくして、身を老いぬ終にもものゝ上手にもならず、  
思ひしやうに身をも持たず、悔ゆれども取返さるゝ齡な

らねば、走りて坂を下る輪の如くに衰へゆく。されば一生  
の中、宗とあらまほしからんことの中に、何れかまさると  
よく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、其外は思ひす  
て、一事を勵むべし。一日の中一時のうちにも、數多のこ  
との來らん中に、少しも益のまさらんことを營みて、其外  
をば打すて、大事をいそぐべきなり。何方をもすて、じと  
心に取持ちては、一事もなるべからず。譬へば碁をうつ人、  
一手も徒にせず、人に先立ちて、小をすて大につくが如し。  
それにとりて、三の石をすて、十の石につくことは安し。  
十を捨て、十一につく事はかたし、一つなりとも勝らん  
方へこそつくべきを、十までなりぬれば、惜しく覺えて、多  
くまさらぬ石にはかへにくし。是をも捨てず、彼をもとら

んと思ふ心に、かれをも得ず、是をも失ふべき道なり。京に住む人、急ぎて東山に用ありて、既に行きつきたりとも、西山にゆきて、其益勝るべきことを思ひえたらば、門より歸りて西山へ行くべきなり。こゝまで來つきぬれば、此事をば先いひてん。日をさゝぬことなれば、西山の事は歸りて又こそ思ひたゝめと思ふ故に、一時の懈怠即一生の懈怠となる、是を恐るべし。一事を必ずなさんと思はば、他の事の破るゝをも痛むべからず。人の嘲をも恥すべからず。萬事にかへずしては、一の大事なるべからず。人のあまた有りける中にて、或者ますほの薄まそほの薄なごいふ事あり、渡邊の聖此事を傳へ知りたりと語りけるを、登蓮法師其座に侍りけるが聞きて、雨の降りけるに、篋笠やある貸

「一大事の云々、佛の妙理を指す」

一五

し給へ、彼の薄のこと習ひに、渡邊の聖のがり尋ね罷らんといひけるを、餘りに物騒がし、雨やみてこそと人の言ひければ、無下の事をも仰せらるゝ物哉、人の命は雨の晴間をも待つものかは、我も死に聖もうせなば、尋ね聞きてんやとて、奔り出で行きつゝ、習ひ侍りにけりと申傳へたるこそゆゝしく有難うおぼゆれ、敏きときは、則ち功ありとぞ、論語といふ文にも侍るなる。此すゝきをいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。今日、は其事をなさんと思へど、あらぬ急ぎ先出で來てまぎれくらし、待つ人は障りありて、頼めぬ人はきたり頼みたる方のことは、たがひて思ひよらぬ道ばかりは、協ひぬ。煩はしかりつる事は、ことなくて、安かるべきことはいさ

心ぐるし。日々過ぎ行くさま兼て思ひつるには似ず。一年の中もかくの如し。一生の間も又しかなりかねてのあらまし皆違ひゆくかと思ふに自ら違はぬ事もあれば、いよくものは定めがたし不定と心得ぬるのみ誠にて違はず。

一五三

妻といふものこそ男の持つまじきものなれ。いつも獨ずみにてなご聞くこそ心にくけれ誰がしが聲になりぬとも又いかなる女をとりすゑてあひ住むなごきつれば無下に心おとりせらるゝわざなり。ことなる事なき女をよしと思ひ定めてこそそひ居たらめと賤しくもおしはかられよき女ならば此男こそらうたくして、あが佛ともりぬたらめたとへば、さばかりにこそと覺えぬべし。ま

一五二

して家の内を行ひをさめたる女いと口おし子なごいできて、かしづき愛したる心うし。男なくなりて後尼になりて年よりたるありさまなき後まで淺まし。いかなる女なりとも明暮そひ見んにはいと心づきなくにくかりなん女のためもなか空にこそならめよそながら時々通ひすまんこそ年月へても絶えぬなからひとともならめ。あからさまに來てとまり居なごせんは、めづらしかりぬべし。夜に入りてももの、映なしといふ人いと口おし萬の物のさら飾り色節も夜のみにこそめでたけれ。晝はとそぎおよすけたる姿にてもありなん、よるはきらゝかに花やかなる装束いとよし。人の氣色も夜の火影ぞよきはよく物いひたる聲も聞くて聞きたる用意ある心にくし、匂ひもも

「おもしろく  
おもしろく  
大人らしき  
なり」



「ゆする湯  
あみし髪あ  
らひなす  
る

一壺

一壺

工匠なり

の、音もだゞ夜ぞひとときはめでたき。さしてことなることなき夜うち更て参れる人の清げなるさましたる。いとよし。わかきごち心といめて見る人は、時をもわかぬものなれば、殊にうち解けぬべきおりふしぞ、けはれなくひきつくるはまほしき。よき男の、日くれてゆするし、女も夜更るほごにすべりつゝ、鏡とりて顔なごつくるひて出づることをかしかれ。

神佛にも、人のまうでぬ日、夜まいりたるよし。

聞き人の人を量りて、其智をしれりと思はん、更にあたるべからず拙き人の碁うつことばかりにさどく巧みなるは賢き人の此藝に愚なるを見て、己が智に及ばずと定め、萬の道の巧我道を人の知らざるを見て己勝れたりと

「文字法師  
の教相にて經  
の文の義理を  
のみ説く者  
暗證法師  
坐禪工夫を  
專にして文  
學に拘らさ  
る者なり

一壺

思はんこと、大なるあやまりなるべし。文字の法師、暗證の禪師、互にはかりて、己にしかかずと思へる、共にあたらず己が境界にあらざるものをば争ふべからず。是非すべからず。

達人の人を見る眼は、少しも誤る所あるべからず。例へば或人の世に虚言を構へい出して、人を謀る事あらんに、素直に誠と思ひて、いふまゝにはからるゝ人あり、餘りに深く信を起して、猶煩はしく虚言を心得そふる人あり、又何としも思はで、心を付けぬ人あり、又聊おぼつかなく覺えて、頼むにもあらず、たのますもあらで案じゐたる人あり、又誠しくは見えねども、人のいふことなれば、さもあらんとて止みぬる人もあり、又様々に推し心得たる由して、賢

「覺束なからぬに虚言なり知れるな

げにうちうなづきほゝるみて居たれどつやく知ぬ人あり又推し出して憐れさるめりと思ひながら猶誤りもこそあれと怪しむ人あり又ことなるやうもなかりけりと手を打て笑ふ人あり又心得たれども知りともいはず覺束なからぬはどかくの事なくしらぬ人とおなじやうにて過る人あり又此虚言の本意を始めより心得て少しも欺かず構出したる人と同じ心になりて力をあはする人あり愚者の中の戯れたにしりたる人の前にては此さまぐの得たる所詞にても顔にてもかくれなくしらぬべし。まして明かならん人の惑へる我等を見んこと、掌の上のものを見んがごとし。但し、かやうのおしはかりにて、佛法までをなすらへ言ふべきにはあらず。

此段は内狂大  
臣殿の狂氣  
をいひしたる  
るべしなる

一六

或人久我繩手を通りけるに、小袖に大口きたる人、木造りの地藏を田の中の水に押浸して、念比に洗ひけり。心得がたくみる程に、狩衣の男二三人出でてきて、爰に御座ましけり。さて、此人をぐしていにけり。久我内大臣殿にてぞおはしける。尋常におはしましける時は、神妙に止事なき人にておはしけり。

此段にて内  
大臣殿平常  
に神妙におは  
せし事を明に  
せり

一七

東大寺の神輿、東寺の若宮より歸座の時、源氏の公卿参られけるに、此殿大將にて先を追れけるを、土御門相國社頭にて、警蹕如何侍るべからんと申されければ、隨身の振舞は、兵杖の家が知る事に候ふとばかり答へ給ひけり。さて後に仰せられけるは、此相國北山抄を見て、西宮の説をこそ知られざりけれ。眷屬の悪鬼悪神を恐るゝ故に、神社に

「女孺」女官の下役なり

「揚名介」遙官にて常陸介なり

三〇

「退丸下乗音」邦下馬札の如き者なり

三〇

ては、殊に先をおふべき理ありとぞ仰せられける。諸寺の僧のみにもあらず、定額の女孺といふこと延喜式に見えたり。すべて数さだまりたる公人の通號にこそ。揚名介にかぎらず、揚名目といふものもあり。政事要畧にあり。

横川の行宣法印が申し侍りしは、唐土は呂の國なり、律の聲なし、和國は單律の國にて、呂の音なしと申しき。

吳竹は葉細く、河竹は葉廣し、御溝に近きは河竹、仁壽殿の方によりて植ゑられたるは吳竹なり。

退凡下乗の卒都婆は、外なるは下乗、内なるは退凡なり。

十月を神無月といひて、神事に憚るべきよしは、記したるものなし。本文もみえず。但當月諸社の祭なき故に、此名あり。

るか。此月萬の神たち、太神宮へ集り給ふなどいふ説あれども、其本説なし。さる事ならば、伊勢には殊に祭月とすべきに、其例もなし。十月諸社の行幸、其例も多し。但しおほくは不吉の例なり。

三〇

「五條天神は」天満宮にあり、天神なり

三〇

勅勘の所に鞆かくる作法、今は絶えて知れる人なし。主上の御惱、大かた世の中のさわがしき時は、五條の天神に鞆をかけらる。鞍馬に鞆の明神といふも、鞆懸けられたりける神なり。看督長の負ひたる鞆を、その家にかけてられぬれば、人出で入らず。此事絶えて後、今の世には封をつくることになりにけり。

犯人を苦にて打つ時は、拷器によせてゆひつくるなり。拷器の様もよする作法も、今はわきまへ知れる人なしとぞ。

「法曹」明法家を云ふ

三〇

比叡山に大師勸請の起請といふ事は慈惠僧正書きはじめ給ひけるなり起請文といふ事法曹にはそのさたなし。いにしへの聖代すべて起請文につきて行はる、政はなきを近代此事流布したるなり又法令には水火に穢をたてず入物にはけがれあるべし。

三〇

徳大寺右大臣殿檢非違使の別當の時中門にて使廳の評定行はれける程に官人章兼が牛はなれて廳の内へ入りて大理の座のはまゆかの上に登りてにれ打かみて臥したりけり重き怪異なりとて牛を陰陽師の許へ遣はすべし由各申しけるを父の相國聞き給ひて牛に分別なし足あれば何くへか登らざらん厩弱の官人偶々出仕の徴牛を捕へらるべき様なしとて牛をば主に返して臥したり

「はまゆか」こは倚子に欄干のあるものなり

「厩弱」無學非力の人を云ふなるべし

三一

ける疊をば替へられにけり敢て凶事なかりけるとなん、怪を見て怪しまざる時は怪しみかへりて壊るといへり、龜山殿たてられんとて地をひかれけるに大きな蛇數もしらす疑り集まりたる塚有りけり此所の神なりといひて事の由を申しければいかゞ有るべきと勅問ありけるに古くより此地を占めたるものならばさうなく堀りすてられ難しと皆人申されけるに此大臣一人王土に居らん虫皇居を建てられんに何の祟りをかなすべき鬼神は邪なし答むべからず只皆堀り捨つべしと申されたりければ塚を崩して蛇をば大井川に流してけり更になりなかりけり。經文などの紐をゆふに上下より襷にちがへて二筋の中

より、わなのかしらを横さまにひき出すことは常の事なり。さ様にしたるをば、華嚴院の弘舜僧正解きて直させけり。是は此比やうの事なり。いと見にくし麗くはたゞくるくくと巻きて上より下へわなのさきをさしはさむべしと申されけり。ふるき人にて、かやうのこと知れる人になん侍りける。

人の田を論ずるもの訴にまけて妬さに、其田を刈りて取れとて、人をつかはしたるに、先道すがらの田をさへ刈りもてゆくを、是は論じ玉ふ所にあらず、いかにかくはといひければ刈る者ども、其所とても刈るべき理なければ、僻事せんとて罷る者なれば、何くをか刈らざらんとぞいひける。とわりいとをかしかりけり。

三〇

呼子鳥は、春のものなりとばかりいひて、いかなる鳥ともさだかに記せるものなし。ある眞言書の中に、よぶこ鳥なく時、招魂の法をば行ふ次第あり、是は鶺鴒なり。萬葉集の長歌に、霞たつ永き春日のなごつ、けたり、鶺鴒鳥も喚子鳥のとざまに通ひてきこゆ。

三二

萬の事は頼むべからず、愚なる人は深く物を頼むゆへに、恨み怒ることあり、勢ひありとてたのむべからず、剛きもの先亡ぶ財多しとて頼むべからず、時の間に失ひやすし。才ありとて頼むべからず、孔子も時に遇はず、徳ありとてたのむべからず、顔回も不幸なりき、君の寵をも頼むべからず、誅をうくること速なり、奴したがへりとて頼むべからず、背きはしることあり、人の志をもたのむべからず、必

三三

す變ず。約をも頼むべからず。信あることすくなし。身をも人をもたのまざれば、是なる時は悦び、非なるときはうらみず。左右廣ければ、さはらず。前後遠ければ、ふさがらず。狭き時は、ひしげ、砕く心を用ゐることす。こしきにして、きびしき時は、物に逆ひ争ひてやぶる。緩くして、柔なる時は、一毛も損せず。人は、天地の靈なり。天地は、限る所なし。人の性なんぞ、異ならん。寛大にして、窮らざる時は、喜怒是にさはらずして、物のために煩はず。

秋の月は、限りなく、めでたきものなり。いつとても、月はかくこそあれとて、思ひ分かさらん。人は、無下に、心うかるべきことなり。

御前の火爐に、火を置く時は、火箸にては、さむことなし。土

三三

器より、直ちに、移すべし。されば、轉びおちぬやうに、心得て、炭を積むべきなり。八幡の御幸に、供奉の人、淨衣をきて、手にて、炭をさゝれければ、ある有職の人、白きものを着たる日は、火箸を用ゐる、苦しからずと申されけり。

三二

想夫戀といふ、樂は、女おとこを戀ふる故の名にはあらず。もとは、相府蓮、文字のかよへるなり。晋の王儉、大臣として、家に蓮を植て、愛せし時の樂なり。是より、大臣を蓮府といふ。廻忽も、廻鶻なり。廻鶻國とて、夷のこはき國あり。其夷漢に伏して、後に來りて、己が國の樂を奏せしなり。

三一

平宣時、朝臣老の後、昔語り、最明寺入道、或宵の間に呼ばる、事ありしに、頓てと申しながら、直垂のなくて、とかくせしほごに、又た使來りて、直垂などの候はぬにや、夜なれ

「さう」  
寂漠の  
文字に當る  
俗言の騒々  
しき事に  
あらず

「かいもち」  
餅搗き  
の事な  
る

つれく草

ば異様なりとも疾くもありしかばなへたる直垂内々の  
まゝにて罷りたりしに、銚子に土器とりそへてもて出で  
て、此酒をひとりたうべんがさうくしければ申しつる  
なり着こそなけれ、人は静まりぬらん、然るにぬべきものや  
あると、何くまでも求め給へどありしかば、紙燭をくさして  
隈々をもとめし程に、臺所の棚に、小土器に、味噌の少しつ  
きたるを見出でて、これぞ求めえてさふらふと申し、か  
ば、事足りなんとて、心よく數献に及びて、興にいられ侍り  
き、其世にはかくこそ侍りしかと申されき。  
最明寺入道鶴が岡の社參の次に、足利左馬入道の許へ、先  
使を遣はして立ち入られたりけるに、あるじ設けられた  
りける様一献に打鮑、二献に蝦、三献にかいもちひにて止

三

みぬ、其座には亭主夫婦、隆辨僧正、主方の人にて座せられ  
けり。さて年毎に給はる、足利の染物心もとなく候ふと申  
されければ、用意し候ふとて、色々の染物三十前にて女房  
ごもに、小袖に調せさせて、後につかはされけり。其時見た  
る人の近くまで侍りしが、語り侍りしなり。  
ある大福長者の曰く、人はよろづを指置きて、一向に徳を  
つくべきなり。貧しくては生けるかひなし、富めるのみを  
人どす徳をつかんと思は、須らく先其心遣ひを修行す  
べし。其心といふは他のことにあらず、人間常住の思ひに  
住して、假にも無常を觀することなかれ。是第一の用心な  
り。次に萬事の用を協ふべからず、人の世にある自他につ  
れて、所願無量なり、欲に隨ひて志を遂げんと思は、百萬

つれく草

の錢ありといふとも暫も住すべからず所願は止む時なし財はつくる期あり限有る財を持ちてかぎりなき願にしががふこと得べからず所願心にきざすことあらば我を亡すべき惡念きたれりと、かたく慎み恐れて小用をもなすべからず次に錢を奴の如くしてつかひ用ゐるものとしらば長く貧苦を免るべからず君の如く神の如く恐れ尊みて従へ用ゐることなかれ次に恥に臨むといふとも怒り恨むることなかれ次に正直にして約をかたくすべし此義を守りて利を求めん人は富の來る事火の乾けるにつき水の下れるに従ふがごとくなるべし錢積りて盡きざる時は宴飲聲色を事とせず居所をかざらず所願をなさしれども心とこしなへに安く樂しと申き押人は

所願を成せんがために財を求む錢を財とする事は願をかなふるが故なり所願あれどもかなへず錢あれども用ゐざらんは全く貧者とおなじ何をか樂とせん此掟はただ人間の望を絶ちて貧を憂ふべからずと聞えたり欲をなしてたのしひとせんよりは若かじ財なからんには瘞を病む者水に洗ひて樂とせんよりはやまざらんにはしかじ爰にいたりては貧富わくところなし究竟は理即にひとし大欲は無欲に似たり  
 狐は人に食付くものなり堀川殿にて舍人がねたる足を狐にくはる仁和寺にて夜本寺の前を通る下法師に狐三飛び掛りてくひつきければ刀をぬきて是をふせぐ間狐二疋をつくびとつはつき殺しぬ二は遁げぬ法師はあま



「事故にてさしなしたるこゝなしたるこゝなり」  
 「命ぜられしに教へられしなり」  
 「千の穴」二ツ目の穴なり  
 「夕の穴」五ツ目の穴なり

た所くはれながら、とゆるなかりけり。  
 四條黄門命せられて曰く、龍秋は道に取ては、やんごとなき者なり。先日來りていはく、短慮のいたり極めて荒涼の事なれども、横笛の五の穴は、聊訝しき所の侍るか。と竊に是を存す。其故は、千の穴は平調、五の穴は下無調なり。其間に勝絶調を隔てたり。上の穴双調、次に鳧鐘調をおきて、夕の穴黄鐘調なり。其次に鸞鐘調を置きて、中の穴盤陟調、中と六とのあはひに神仙調有り。かやうに間々に皆一律をぬすめるに、五の穴のみ上の間に調子を持たずして、しかも間を配る事ひとしき故に、其聲不快なり。さればこの穴を吹く時は、必ず除く、除けあへぬ時は、物にあはず、吹き得る人かたしと申しき。料簡のいたり、誠に興あり。先達後生

「性骨」天性の風骨なり

三

を恐るといふこと、此事なりと侍りき。他日に景茂が申し侍りしは、笛は調へおほせて持ちたれば、唯吹くばかりなり。笛は吹きながら、息の中にて且つ調へもてゆくものなれば、穴毎に口傳の上に、性骨を加へて、心を入るゝこと、五の穴のみに限らず、偏にのゝとばかりも定むべからず。悪しく吹けば、何れの穴も快からず。上手はいづれをもふきあはず。呂律のものにかなはざるは、人の科なり。器物の失にあらずと申しき。  
 なに事も邊土はいやしく頑固なれども、天王寺の舞樂のみ都にはちすといへば、天王寺の伶人の申し侍りしは、當寺の樂はよく圖をしらべあはせて、物の音のめでたくとのほり侍ること、外よりも勝れたる故は、太子の御時の

「博士」  
は師匠さ  
するなごい  
はんが如し

圖今に侍るを博士とす所謂六時堂の前の鐘なり其聲黃  
鐘調のもなかなり寒暑に随ひて上り下り有るべき故に  
二月涅槃會より聖靈會までの中間を指南とす秘藏のこ  
となり此一調子をもちて何れの聲をも調へ侍るなりと  
申しき凡そ鐘の聲は黃鐘調なるべし是無常の調子祇園  
精舎の無常院の聲なり西園寺の鐘黃鐘調子にいたるべ  
しとてあまた度鑄更へられけれどもかなはざりけるを  
遠國より尋ね出されけり金剛院の鐘の聲又わうしきて  
うなり。  
建治弘安の比は祭の日の放免のつけものにとやうなる  
紺の布四五端にて馬をつくりて尾髪にはとうしみをし  
てくもの井かきたる水干に着けて歌の心などいひてわ

「水干」衣服  
の名なり

三

「過差」衣服  
車馬等のか  
さりの法令  
に差し過た  
るなり

三

たりしとつねに見及び侍りしなども興有りてしたる心  
ちにてこそ侍りしかと老ひたる道志どもの今日も語り  
侍るなり此比は付けもの年を送りて過差殊の外になり  
て萬の重きものを多くつけて左右の袖を人に持たせて  
自らは鋒をだにもたす息つき苦しむありさまいと見ぐ  
るし。  
竹谷の乗願房東二條院へ參られたりけるに亡者の追善  
には何事か勝利おほきと尋させ給ひければ光明眞言寶  
篋印陀羅尼と申されたりけるを弟子どもいかにかくは  
申し給ひけるぞ念佛にまさること候ふまじとはなど申  
し給はぬぞと申しければ我宗なればさこそ申さまほし  
かりつれどもまさしく稱名を追福に修して巨益あるべ

「たづのお  
ほいごのお  
九條基家也」  
三三

しと説ける經文を見及ばねば何にみへたるぞと重ねて  
問せ給はいいかい申さんと思ひて本經のたしかなるに  
つきて此眞言陀羅尼をば申しつるなりとぞ申されける。  
たづのおほいごのは童名たづ君なり鶴を飼ひ給ひける  
故にと申すは僻事なり。  
陰陽師有宗入道鎌倉より上りて尋ね詣で來りしが先さ  
し入りて此庭の徒に廣きこと淺ましくあるべからぬ事  
なり道を知るものは植ることをつとむ細道ひとつ残し  
てみな島につくり給へと諫め侍りき誠にすこしの地を  
も徒にをかんことは益なき事なり食物藥種などをうる  
おくべし、  
多久資が申しけるは通憲入道舞の手の中に興あること

三三

「鞘巻にて太  
刀の鞘を色  
々の糸にて  
巻たるなり」

「龜菊後鳥  
羽院の籠た  
女請いたる舞  
なり」

「前司以前  
國司を勤め  
し者なり」  
三三

ごもを撰びて、磯の禪師といひける女に教へて舞せけり。  
白き水干にさうまさ指せ鳥帽子をひき入れたりけれ  
ば男舞とぞいひける禪師がむすめ静といひける此藝を  
つげり是白拍子の根元なり佛神の本縁をうたふ其後源  
光行多くのことをつくれり後鳥羽院の御作もあり龜菊  
に教へさせ給ひけるとぞ。  
後鳥羽院の御時信濃前司行長稽古のほまれ有りけるが  
樂府の御論義の番に召されて七徳の舞を二つ忘れたり  
ければ五徳冠者と異名をつきにけるを心うきことにし  
て學問をすて遁世したりけるを慈鎮和尚一藝あるも  
のをば下部までも召しおきて不便にせさせ給ひければ  
此信濃入道を扶持し給ひけり此行長入道平家物語を作  
つれく草

「山門」叡山にて延暦寺なり

「妙観」寶龜年間の佛工なり

「百日の鯉」毎日百日が間つとめて鯉をきるなり百日替古の類なるべし

りて生佛といひける旨目に教へて語らせけり。さて山門の事を殊にゆゝしくかけり。九郎判官のことは委しく知りて書きのせたり。蒲冠者のことは能く知らざりけるにや、多くの事どもを記しもらせり。武士の事、弓馬の業は、生佛東國の者にて、武士に問ひ聞きてかゝせけり。彼生佛が生れつきの聲を、今の琵琶法師は學びたるなり。六時禮讃は、法然上人の弟子安樂といひける僧經文を輯めて作りて勤にしけり。其後太秦の善觀房と云僧。ふし博士を定めて聲明になせり。一念の念佛の最初なり。後嵯峨院の御代より生まれり。法事讃も同じく善觀房始めたるなり。

千本の釋迦念佛は、文永の比、如輪上人之を始められけり。

よき細工は、少しにぶき刀をつかふといふ。妙観が刀はいたいたゝす。

五條内裏にはばけものありけり。藤大納言殿かたられ侍りしは、殿上人ども、黒戸にて碁をうちけるに、御簾をかゝげて見るものあり。誰ぞと見向きたれば、狐人のやうにひいて、さしのぞきたるを、われ狐よとごよまれて、まごひ遁げにけり。未練の狐ばけ損じけるにこそ。

園の別當入道は、さうなき庖丁者なり。或る人の許にて、いみじき鯉を出だしたりければ、皆人別當入道の庖丁を見ばやと思へ共容易く打出でんもいかゞとためらひけるを、別當入道さる人にて、此程百日の鯉を切り侍るを、今日かき侍るべきにあらず、曲げて申し受けんとて、さらけ

「つきく」相應の意なり

る、いみじくつきくしく興有りて人ども思へりけるど、  
或人北山太政入道殿に語り申されたりければ、か様の事  
己は世にうるさく覺ゆるなり、切りぬべき人なくば、賜べ  
きらんぞといひたらんは猶よかりなん、何條百日の鯉を切  
らんぞと宣ひたりしを、かしくおぼへしと人のかたり給  
ひける、いとをかし。大方ふるまひて興あるよりも、興なく  
て安らかなるがまさりたる事なり。まれ人の響應なども、  
ついでをかしきやうに、執り作したるも、誠によけれど、  
只其事なくてとり出でたるいとよし。人に物をとらせた  
るも、ついでなくて是を奉らんといいひたる、誠の志なり。惜  
むよし、て乞はれんと思ひ、勝負の負業に事付なごした  
るむづかし。

三言

都て人は無智無能なるべきものなり。或人の子の見状な  
ごあしからぬが、父の前にて人どものいふとて、史書の文  
を引きたりし、賢しくは聞えしかども、尊者の前にてはさ  
らずともと覺へしなり。

三言

又たある人の許にて、琵琶法師の物語をさかんとて、琵琶  
を召し寄せたるに、ぢうの一つおちたりしかば、作りて付  
けよといふに、或男の中にあしからずと見ゆるが、古きひ

「ちう」琴柱なり

「ひさく」水  
を割む器なり

さくの柄有りや、なご言ふを見れば、爪を生ふしたり。琵琶  
などひくにこそ、盲人法師の琵琶、其沙汰にも及ばぬ事な  
り。道に心得たるよしにやと片腹いたかりき。ひさくの柄  
はひもの木とかやいひて、良らぬ物にとぞある人仰せら  
れし。若き人は、少しの事もよく見えわろく見ゆるなり。

三三

萬の過あらじと思は、何事にも誠ありて、人をわかず恭しく詞すくなからんにはしかじ。男女老少みなさる人こそよけれども、殊に若く貌よき人の言うるはしきは、忘れがたく思ひつかるゝ物なり。萬のことがは馴れたる様に上手めき所えたる氣色して、人をないがしろにするにあり。人のものを問ひたるに、しらすしもあらじ、ありのまゝにいはんはおこがましとにや、心惑はすやうに返り言したるよからぬ事なり。知りたる事も、猶さだかにと思ひてや問ふらん。又誠に知らぬ人もなごかなからん。うらゝかに言ひ聞かせたらんは、おとなしく聞えなまし。人は未だ聞き及ばぬ事を、我知りたるまゝに、さても其人の事の淺ましきなごばかりいひやりたれば、いかなるこ

三三

問ふ人の耳にたぬやう何さなくいふなり

三三

三三

とのあるにかと、推返しとひに遣るこそ心づきなけれ。世に舊りぬることをも自ら聞き洩すあたりもあれば、覺束なからぬやうに告遣りたらん、悪しかるべきことかは。かやうの事はものなれぬ人の有ることなり。主ある家には、すゝなる人、心の儘に入りくる事なし。主なき所には、道行人、猥りにたち入り、狐鼻やうのものも、人氣にせかれねば、所えがほに入りすみ、こだまなごいふけしからぬ形もあらはるゝものなり。又鏡には色形なき故に萬の影來りてうつる。かゝみに色形あらましかば、うつらざらまし。虚空よくものをいる、我等が心に念々のほしさまゝに來り浮ぶも、心といふものゝなきにやあらん。心に主あらましかば、胸の中に若干の事は入りきたらざら

怪に非ず山彦又空谷響の荒れたる家の様なり

三

丹波に出雲といふ所あり。大社を遷してめでたくつくり、志太の某とかやしる所なれば、秋の比聖海上人、其外も人あまたさをひて、いざ給へ出雲拜みに、かおもちひめさせんとて、具しもていきたるに、各拜みてゆゝしく信を起したり。御前なる獅子、狛犬背きて後ろさまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、あなめでたや、此獅子の立ち様いと珍らし、深き故あらんと涙ぐみて、いかに殿原殊勝の事は御覽じとがめずや、無下なりといへば、各々怪しみて、誠に他に異なりけり。都の苞にかたらんなごいふに、上人猶ゆかしがりて、おとなしく物しりぬべき顔したる神官を呼びて、此御社の獅子のたてられやう、定めて習ひある

「苞」土産なり

ことに侍らん、ちと承らばやといはれければ、其事に候ふさがなき童どもの仕りける、奇怪に候ふことやとて、さし寄りて据ゑなほしていにければ、上人の感涙いたづらになりにけり。

「柳管」柳の枝をあみて作りたるものなり

三

柳管にすうるものは、縦様よござま、物によるべきにや、巻物なごはたてさまにおきて、木のあはひより紙捻を通してゆひつく硯もたてさまにおきたる筆ころばすよしと、三條右大臣殿仰せられき、勘解由小路の家、の能事の人々は、假にも縦さまに置かるゝことなし、必ず横様に据ゑられ侍りき。

御隨身近友が自讃とて、七ヶ條書きとめたることあり。みな馬藝させることなき事どもなり。其例を思ひて、自讃

當代云ふ  
は分明なら  
醒れども後  
醒るべし  
代云ふな

のこと七つあり。  
一人あまたつれて花見ありきしに、最勝光院の邊にて男  
子の馬を走らしむるを見て、今一度馬をはするものな  
らば、馬倒れて落つべし、しばし見給へとて立ち止りた  
るに、又馬を馳す止むる所にて馬をひき倒して、乗れる  
人泥土の中に轉び入る。其詞の誤らざる事を人皆感ず。  
一、當代いまだ坊に御座まし、頃萬里小路殿御所なりし  
に、堀川大納言殿祇候し給し御曹子へ用ありて参りた  
りしに、論語の四五六の卷をくりひろげ給て、只今御所  
にて紫の朱奪ふ事を憎むといふ文を御覽せられたき  
事ありて、御本を御覽すれども、御覽じ出されぬなり、猶  
よくひき見よと仰事にて求るなりと仰せらるゝに、九

「款狀」禁中  
へ官位を望  
み又は訴訟  
なごを申上  
る時の狀也

の卷の其處／＼の程に侍ると申したりしかば、あな嬉  
しとてもて参らせ玉ひきかほごの事は、兒ごも、常の  
事なれど、昔の人は聊のことも、いみじく自讃したる  
なり、後鳥羽院の御歌に、袖と袂と一首の中にあしかり  
なんやと、定家卿に尋ね仰せられたるに、秋の野の草の  
袂か花すゝきは、ほにいてゝまねく袖と見ゆらんと侍れ  
ば、何事のさふらふべきと申されたることも、時に當り  
て本歌を覺悟す、道の冥加也、高運也など、事々しく記し  
おかれ侍るなり。九條相國伊通公の款狀にもことなる  
事なき題目をも書きのせて、自讃せられたり。  
一、常在光院の撞鐘の銘は、在兼卿の草なり、行房朝臣清書  
して鑄かたに寫させんとせしに、奉行の入道、彼草を取



出て見せ侍りしに、花の外に夕をおくれば、聲百里に聞ゆといふ句あり、陽唐の韻と見ゆるに、百里謬りかと申したりしを、よくぞ見せ奉りける己が高名なりとて、筆者の詐へいひ遣りたるに、あやまり侍りけり、數行と直さるべしと返事侍りき、數行もいかなるべきにか、もし數歩の意か、覺束なし。

一、人數多伴ひて、三塔順禮の事侍りしに、横川の常行堂の中、龍花院とかける古き額あり、佐理行成の間、疑ひありて、いまだ決せずと申し傳へたりと、堂僧事々しく申し侍りしを、行成ならば裏書あるべし、佐理ならば裏書有るべからずといひたりしに、裏は塵積り、蟲の巢にて、いぶせげなるを、よくはき拭ひて、各見侍りしに、行成位署

「三塔」觀山の東塔、横川の西塔なり

「位署」姓名の上に官位を書き連ねるなり

「八災」憂、苦、喜、樂、尋伺、出息、入息を云ふなり

「所化」弟子なり

「加持香水」後七日の御修法に行はるゝ法式なり

名字年號さだかに見え侍りしかば、人皆な興に入る。

一、那蘭陀寺にて道眼聖談義せしに、八災といふ事を忘れて、誰か覺へ給ふといひしを、所化みな覺えざりしに、局の中より、これづくにやといひ出したれば、いみじく感じ侍りき。

一、賢助僧正に伴ひて、加持香水を見侍りしに、未だはてぬほごに、僧正かへりて侍りしに、陣の外まで僧都見えず。法師どもを返して求めさするに、同じ様なる大衆多くて、え求めあらずといひて、いと久しくて、出でたりしを、あなわびし、夫求めておはせよといはれしにかへり入りて、頓て具して出でぬ。

一、二月十五日あかき夜うち更けて、千本の寺にまうで

「すりのき」  
退去するを  
云ふ

後より入て、一人顔ふかくかくして聴聞し侍りしに、  
 優なる女の姿にほひ人より異なるが、分け入りて膝に  
 居かゝれば香ひなごも移るばかりなれば、便あしと思  
 ひてすりのきたるに、猶居寄りて同じさまなれば立ぬ  
 其後ある御所さまの、ふるき女房の、そいろごといはれ  
 し序でに無下に色なき人におはしけりと見おとし奉  
 る事なんありし情なしと恨み奉る人なんあるとの給  
 ひ出したるに更にこそ心得侍らねと申して止ぬ、此事  
 後に聞き侍りしは、彼聴聞の夜、御局の内より人の御覽  
 じしりて、さぶらふ女房をつくりたて、出し給ひて、便  
 よくはことばなごかけんものぞ、其ありさま参りて申  
 せ興あらんとてはかり給ひけるとぞ。

三

八月十五日、九月十三日は婁宿なり、此宿清明なる故に、月  
 をもてあそぶに、良夜とす。

三

しのぶの浦のあまのみるめも所せく、くらぶの山も、もる  
 人しげからんに、わりなく通はん心の色こそ、淺からず哀  
 とおもふふしぐの、忘れがたきことも多からめ、親はら  
 からゆるして、ひたぶるにむかへすゑたらん、いとまばゆ  
 かりぬべし、世にありわぶる女の、似げなき老法師、あやし  
 の東人なりとも、にぎはしきにつきて、さそふ水あらば  
 なごいふを媒人いづかたも心にくきさまにいひなして、  
 しられずしらぬ人を迎へもて来たらんあひなさよ、何事  
 をかうち出づる言の葉にせん、年月のつらさを、分けこ  
 しは山のなごもあひかたらはんこそ、つきせぬ言の葉に

てもあらめずべてよその人のとりまかなひたらんうた  
 て心づきなまきこと多かるべしよき女ならんにつけても  
 品くだり見にくく年もたけなん男はかくあやしき身の  
 ためにあたら身をいたづらになさんやはと人も心おと  
 りせられわが身はむかひ居たらんも影はづかしくおぼ  
 えなんいとこそあいながらめ梅の花かうばしき夜の臙  
 月にたゝすみ御垣が原の露分け出でん有明の空も我身  
 さまに忍ばるべくもなからん人はたい色このまざらん  
 にはし加じ。

望月のまごかなることば暫も住せずやがてかけぬ心止  
 めぬ人は一夜の中にさまでかはるさまも見えぬにやあ  
 らん病の重るも住する隙なくして死期すでに近しされ

ごもいまだ病急ならず死に趣かざるほどは常住平生の  
 念に習ひて生の中に多くの事をなして後静に道を修せ  
 んと思ふほどに病をうけて死門に望む時所願一事も成  
 せずいふかひなくて年月の懈怠を悔いて此度若し立直  
 りて命をまたくせば夜を日につぎて此事彼事怠らず成  
 じてんと願をおこすらめどやがておもりぬれば我にも  
 あらず取亂して果てぬ此類ひのみにはあらめ此の事ま  
 つ人々急ぎ心におくべし所願を成じて後暇ありて道に  
 ひかはんとせば所願つくべからず如幻の生の中に何事  
 をかなさんすべて所願皆妄想なり所願心にきたらは妄  
 心迷亂すと知りて一事をもなすべからず直に萬事を放  
 下して道に向ふ時はさはりなく所作なくて心身永く静

違ふ心違ふ事違ふ心違ふ事  
違ふ心違ふ事違ふ心違ふ事  
違ふ心違ふ事違ふ心違ふ事

二

なり。こしなへに違順につかはるゝことは偏に苦樂のためなり。樂といふは好み愛する事なり。之を求むること止む時なし。樂欲する所一には名なり。名に二種あり。行跡と才藝とのほまれなり。二には色欲。三には味なり。よろづのねがひ此三にはしかず。これ顛倒の相より起りて若干の煩ひあり。求めざらんにはしかじ。八つになりし年。父に問ふて曰く。佛はいかなるものにか候ふらんといふ。父はいはく。佛には人のなりたるなりと。又とふ。人は何として佛にはなり候ふやらんと。父又佛の教へによりてなるなりと。こたふ。又問ふ。教へ候ひける佛をば何が教へ候ひけると。又こたふ。それも又前の佛のを

しへによりて成玉ふなりと。又とふ。其をしへはじめ候ひける第一の佛はいかなる佛にか候ひけるといふ時。父空よりやふりけん。土よりやわきけんといひてわらふ。問ひつめられてえこたへすなり。侍りつと諸人にかたりて興じき。

校訂徒然草終